



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 魯迅伝覚書：＜狂人日記＞発表（一九一八）から女師大事件（一九二五）まで                                               |
| Author(s)        | 猪股，庄八                                                                             |
| Citation         | 北海道大學文學部紀要，12，137-180                                                             |
| Issue Date       | 1964-03-18                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/33284">https://hdl.handle.net/2115/33284</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 12_P137-180.pdf                                                                   |



魯迅伝覚書

—「狂人日記」発表（一九一八）から女師大事件（一九二五）まで—

猪俣庄八

## 魯迅 伝 覚 書

— 狂人日記V 発表 (一九一八)  
から女師大事件 (一九二五) まで —

猪 俣 庄 八

### 目 次

- (一) 狂人日記V — 「新青年」
- (二) 五四運動 — 翻訳・作品 — 文学研究会
- (三) 阿Q正伝V — 創造社 — エロシエンコ
- (四) 周作人との決裂 — 「呐喊」・「中国小説史略」
- (五) 五卅惨案 — 女師大事件
- (六) 結 語

附 録 : 魯迅年譜補遺 (一九一八 — 一九二五)

### (一) 狂人日記V — 「新青年」

一九一八年 (民国七年)、魯迅三十八歳のこの年は、彼がそれまでの六年間にわたる長い沈黙を破つて中国最初の近代小説ともいふべき作品を発表し、作家——魯迅としての第一歩を印したことで記念されなければならない。許壽裳編「魯迅先生年譜」(以下「年譜」と略称)にも『自四月開始創作以後、源源不絶、其第一篇小説狂人日記、以魯迅爲筆名、載在新青年第四卷第五號、抨擊家族制度与礼教之弊害、実爲文學革命思想革命之急先鋒。』とみえる。魯迅がこの狂

人日記Vを発表するまでの経過はかつて別稿<sup>(2)</sup>において述べたが、彼自らこの小説に關連して次のように述べている。『……從一九一八年五月、狂人日記V 阿Q乙己V 藥V等、陸續の出現了、算是顯示了「文學革命」的實績、又因那時的認爲「表現の深切和格式の特別」、頗激動了一部分青年讀者的心。然而這激動、却是向來怠慢了紹介歐洲大陸文學的緣故。一八三四年頃、俄國の果戈理(N. Gogol)就已經爲了狂人日記V；一八八三年頃、尼采(Er. Nietzsche)也早借了蘇魯支(Zarathustra)的嘴、說過「你們已經走了從蟲豸到人的路、在你們裏面還有許多倫是蟲豸。你們做過猴子、到了現在、人還尤其猴子、無論比那一個猴子」的。……但後起的狂人日記V意在暴露家族制度和礼教的弊害、却比果戈理的憂憤深廣、也不如尼采的超人的渺茫。』(「中国新文學大系小説二集序」——且介亭雜文二集)

狂人の手記という、ヨーロッパ近代小説の斬新なスタイルを借りて『家族制度と礼教の弊害を暴露』したこの小説が當時の若い読者層を激しくゆさぶつたことは想像に難くない。また、この作品をもつてに當つて魯迅がゴーゴリーの狂人日記V等を念頭においたことも理解されるが、ただ『……却比果戈理的憂憤深廣、也不如尼采的超人的渺茫。』というその真意はおそらくこの作品がより直截的、効果的であることのほのかな自負を示すものではあるまいか。ともあれ『家族制度と礼教』は魯迅がその中で苦しみ、嫌悪したものである。その『弊害を暴露』することは人間を束縛する旧いものの本質を抉剔し、それからの脱出、解放の念願が伏在する。その念願こそまぎれもなく彼自身のものであるが、同時にそれはまた「新

青年」の掲げたスローガンでもあつた。「新青年」の唱える思想革命に対する彼の共感はこれによつても窺えるし、またそれが『文學革命の實績』であつたことも疑う余地はない。さて、魯迅はこの作品によつて作家としての第一歩を印したのであるが、しかし、それは寧ろ結果としてそうなつたというに近く、彼が始めから作家を意識して書いたものでないことを見逃してはなるまい。魯迅の次のような発言がそれを証明する。

『但我的來做小説，也並非自以爲有做小説的才能，只因爲那時是住在北京的會館裏的，要做論文罷，沒有參考書，要翻譯罷，沒有底本，就只好做一點小説模樣的東西塞責，這就是狂人日記。大約所仗的全在先前看過的百來篇外國作品和一點醫學上的知識，此外的準備，一點也沒有。』（『我怎麼做起小説來』——『南腔北調集』）

すなわち、魯迅はなにかまとまつた仕事を手がけるには資料がなく、やむをえず小説を書いて責めを塞ぐ（錢玄同との約束）ことにした、というのである。創作の経験としてはわずかに一九一二年に試作した『懷旧』一篇だけであり、自分にその能力があるか否かに確信があるわけではない。抛るべきものとしては、これまでに読んだ百余篇の外国小説といささかの医学上の知識のみである。そのような状態であつてみれば、彼に小説作家への意識があつたとはみられない。これは、しかし、当時としては寧ろ当然のことであり、作家としての成立条件がやや可能になつたのは少くとも一九二一年創造社結成以後のことに属する。また魯迅にしてもその他の職務と離れてもつばら文筆による生活に入つたのは一九二七年八月上海に定

住するようになってからである。<sup>(7)</sup>

次に『狂人日記』の文体について一言する。ここにみえる文語と口語の併用あるいは文語とも口語ともつかぬ一種の文体は確かに竹内好氏の言うように『狂人』にふさわしい文体（『魯迅』——世界評論社版）とみられ、『狂人心理の表現として成功すると同時に文章改革の試みとして成功することになった。』（同）ことも事実であろう。

しかし、同時にそれはまた彼が従来手がけて来た各種の著作、翻訳の文体、さらに章太炎から受けた表現上の影響等々の発展段階として捉えられなければならないまい。胡適の首唱する当時の文学革命、白話文学運動の渦中に、この種の独自の文体をとつたことは文章改革の面における彼なりの苦心と確信があつたものと察せられる。その間の消息を彼は次のように述べている。『我做完之後，總要看兩遍，自己覺得拗口的，就增刪幾個字，一定要他讀得順口，沒有相宜的白話，寧可引古語，希望總有人會懂，只有自己懂得，或連自己也不懂的生造出來的字句，是不大用的。』（『我怎麼做起小説來』——『南腔北調集』）

これは勿論彼の小説全般についての発言であるが、ともかくも、ここには自己の文体確立のための苦心がにじみ出ている。それにはまずリズムのなだらかさど読者の理解とが強調されるが、わけでも『ふさわしい白話がなければ寧ろ古語を引くのがいい』という主張の中には、やはり当時の文章改革、白話運動に対する彼自身の批判が含まれているとみられよう。魯迅が白話運動の推進者であることは、この年（一九一八）に書いた雑文（『隨感錄五十七』——『熱風』）の中

で白話に反対する人を『現在の屠殺者』ときめつけていることから  
もすでに明らかである。しかし、魯迅の意図する白話は当時の首唱  
者である胡適のそれとはいささか趣きを異にする。胡適が唐宋以来  
の白話文学の伝説をふまえて『白話文学之爲中國文學之正宗、又爲  
將來文學必用之利器可斷言也。』（『文学改良芻議』）という限りにお  
いてそれは正しかった。しかし、彼は例えば『三國志』『水滸傳』  
『西遊記』等一連の白話小説群を称揚するあまり殆んど既成の白話  
一辺倒に墜ち入った感すらある。これはいわば古文の權威に代える  
に新しい白話の權威をもつてする態度にはかなるまい。しかも、  
胡適自身の白話はその權威に極めて樂觀的に依存するとともに平  
俗、浅薄のそしりを免れない。魯迅は、おそらく、胡適のそのよう  
な態度にあきたりなかつたのではなかつたか。魯迅はなにごとによ  
らず既成の權威に抛りかかることを極端に嫌う人である。つまり、  
魯迅における文学革命は外面的な權威に依存して行われるものでは  
なく、内面的な葛藤の後に始めて完成されるものでなければならな  
い。△狂人日記Ⅴの文語とも口語ともつかぬ独自の文体はそのよう  
な彼自身の内面的な葛藤、つまり、その發展的形態として現われた  
ものと解すべきであろう。さて、△狂人日記Ⅴが出現するまでの経  
緯が以上のものであつてみれば、それが魯迅の作家へのスプリング  
ボードになつたことには異論はないが、作家への急転回を意味する  
ものでないこと勿論である。魯迅の転回は徐々に、しかし、着実に  
つきかさねられて行く。『然而我那時對於「文学革命」、其實並沒有  
怎樣的熱情』（△自選集自序Ⅴ）『南腔北調集』と述べた魯迅もこの前後

から「新青年」陣営に寧ろ積極的に協力して行くようになる。その  
過程を「呐喊」の序では失望から希望への目覚めとして説いている  
わけであるが、彼はついで「新青年」の単なる寄稿者たるにとどま  
らず、その編集会議にまで参劃するようになる。それは、たとえば  
彼自身が『我最初看見守常先生（李大釗―筆者）的時候、是在獨秀先  
生邀去商量怎樣進行新青年的集會上、這樣就算認識了。』（△守常全  
集題記Ⅴ）『南腔北調集』と述べ、また『新青年每出一期、就開一次編  
輯會、商定下一期的稿件。其時最惹我注意的是陳獨秀和胡適之。』  
（△憶劉半農君Ⅴ）『且介亭雜文』と記していること、或いは沈尹默が  
『新青年雜誌由獨秀帶到北京之後、有一時期、曾交由魯迅弟兄・玄  
同・胡適和我分期擔任編輯……』（△魯迅生活中的一節Ⅴ）『文芸月報』  
一九五六年十月号）と述べていることによつて知られる。ともあれ、  
△狂人日記Ⅴの反響がそれを促がす契機となつたとも思われるが、  
魯迅は『一發而不可收』（『呐喊』序）と述べているようになり積極  
的に「新青年」への執筆の度をかさねている。この年に発表したも  
のをあげると、△我之節烈觀Ⅴ（『新青年』五卷二号）△隨感錄Ⅴ（同  
三号）△五号）△渡河與引路Ⅴ（同五号）<sup>10</sup>等々の外に、△夢Ⅴ（同四卷五  
号）△愛之神Ⅴ（同）△桃花Ⅴ（同）△他們的花園Ⅴ（同五卷一号）  
△人與時Ⅴ（同）等のいわゆる新詩がある。魯迅の詩における造詣  
の深さはかつての△摩羅詩力說Ⅴ（一九〇七）及びその前後にものし  
た旧詩等によつても充分に窺えるのであるが、これらの新詩をもの  
したことにについては彼自ら『……以後回到中國來……也做了幾首新  
詩。我其實是不喜歡做新詩、——但也不喜歡做古詩、——只因爲那

時詩壇寂寞、所以打打邊鼓、湊些熱鬧；待到稱為詩人的一出現、就洗手不作了。』（『集外集』序言）と述べている。つまり、魯迅はその新旧を問わず詩作は好まないのだが、当時の沈滞した詩壇を振り立たせるために新詩を手がけた、というのであり、また事実彼の以後の作品には新詩は中断している。いずれにせよ、これらの新詩が彼の全作品に占める比重は極めて輕微であり、特筆するまでもあるまい。<sup>(1)</sup>尤もそれは新詩という形式をとらなかつたというだけで、たとえば「野草」のようにすぐれた散文詩があり、また彼の雜文そのものに詩的要素が凝結していることを言うを俟たない。

なお、「年譜」に『是年仍搜羅研究拓本。』とみえるように、「新青年」への積極的な寄稿活動とともに拓本の搜集、研究が併行的に続けられていたわけであるが、それについてはやはり「魯迅日記」の「書帳」等が参照される。

## (二) 五四運動—翻訳・作品—文学研究会

ついで、一九一九年（民國八年）。この年の「年譜」にはまず『一月發表關於愛情之意見、題曰隨感錄四十、載在新青年第六卷第一號、後收入雜感錄熱風。』とみえる。この隨感錄四十をとくに摘出記入したのは魯迅の妻との關係を暗示するためであるという。<sup>(2)</sup>なお魯迅はかつて東京留學中、一九〇六年六月に帰國して家族、親戚の設定のままに朱安女士と結婚したこと及びこの年（一九一九）ある未知の青年から、父母の命により一片の愛情すらもなく恰も二匹の獸のように結びつけられた結婚を哀しむ内容の新詩を受け取り、それ

に対する感慨を「隨感錄四十」として「新青年」に發表したこと等についてはすでに別稿<sup>(3)</sup>において述べたので、ここでは割愛することにする。

ついで、この年の四月に小説「孔乙己」を、五月には「藥」をそれぞれ「新青年」（六卷四号・六卷五号）に發表した。これは「狂人日記」につづく第二、三作であるが、その内容の紹介等については一九二三年「呐喊」出版の項にとりまとめて述べることにする。

さて、この年の特記すべき事件としては五月四日に勃発したいわゆる五四運動がある。これは文学革命によつて觸発された革命精神の波の最初の頂点であり、魯迅自らも『说到中國的改革、第一著自然是掃蕩廢物、以造成一個使新生命得能誕生的機運。五四運動、本也是這機運的開端罷……』（「出了象牙之塔・後記」）と述べているように、まさに新旧交替の最初の機運とも称すべき運動である。毛沢東はこの運動の本質をとらえ、これを『文化革命』（「新民主主義論」）と呼んでいるが、彼はこの文化革命と魯迅との關係について述べ、『魯迅は中國文化革命的主將、他不但是偉大的文學家、而且是偉大的思想家和偉大的革命家。魯迅的骨頭是最硬的、他没有絲毫的奴顏和媚骨、這是殖民地半殖民地人民最可寶貴的性格。魯迅是在文化戰線上、代表全民族的大多數、向着敵人冲鋒陷陣的最正確・最勇敢・最堅決・最忠實・最熱忱的空前的民族英雄。魯迅的方向、就是中華民族新文化的方向。』（「新民主主義論」）と激賞している。毛沢東の魯迅に対する傾倒は並々ならぬものがあり、それはまた深い洞察を通して得られたものであること論を俟たぬ。ただ、毛沢東は五四文化

革命の最も卓越した象徴を魯迅にみているのであつて、魯迅がこの運動の勃発に際し、その実践の先頭に立つたというのではない。たとえば、この年の「魯迅日記」五月四日の項にはこれに就いての記述は全くない。その前後は例によつて書信或いは友人との往来、書籍の購入等々が記されているだけである。これはこの日記の性質からして当然ともいえるのであるが、しかし、かつて一九一七年、張勳の復辟に當つて記述した例もあり、この運動の重要性からすればなんらかの記述があつてしかるべきだとも思われる。しかるに、これに就いては全く触れられていない。その理由はよく分らないが、

ただ記述が全く省略されているということが直ちに無関心の表明でないことは勿論であろう。これは、たとえば許景宋が『他的日記』寫的大約は不大不小的事。太大了、本有關心了、不願意寫出；太小了、沒有什麼關係了、也不願意寫出。』（魯迅先生的日記Ⅴ「欣慰的紀念」）と述べているように『あまりに大きすぎ、あまりに關心があまりすぎ』て『書くことを欲しなかつた』例と解すべきなのであろうか。ともあれ、その頃魯迅は小説・雜感を發表する以外に、「新青年」の編集にも参加し、『爲前驅者取同一歩調的』（『自選集自序Ⅴ「南腔北調集」』）のであるが、そのような中で歴史的な五四運動は勃発したのである。これに対応する魯迅の態度はやはり文学革命の場合など一脈相通するものがあると思われるが、しかし、彼が受けた衝激の度合いは当然その比ではあるまいと思われる。かくして、王士菁がこれについて『在一個實際的歷史事件的進行中、他一聲不响地埋頭工作、仔細地觀察・分析・研究這一運動的本質・不和別的參

加者一樣、熱血衝昏了頭腦、跑到隊伍裏大叫大嚷一陣、然後偷偷地向後轉開了小差；魯迅却始終是冷靜的、老老實實地、腳踏實地做他的並不驚天動地的事情。』（『魯迅伝』）と述べている、その観法が比較的に穩当なものと解されよう。

つぎに、『八月買公用庫八道灣屋成、十一月修繕之事略備、與二弟作人俱遷入。』（『年譜』）とみえる。つまり、かつて一九一二年以来住みなれた紹興縣館（宣武門外南半截胡同）をひきはらつて八道灣十一号の住宅に移転したわけである。これを「魯迅日記」に参照すれば十一月二十一日に弟の周作人家族とともに移り、同二十九日には家屋の修繕が略々完了したことになる。

ついで、「年譜」には『十月發表關於改革家庭與解放子女之意見、題曰我們現在怎樣做父親、載新青年第六卷第六號、後收入論文集墳。』とみえる。この雜感を書いた本意は『其實是想研究怎樣改革家庭：』と冒頭に述べてあり、家庭の改革は後から來る人々、子女の解放につながるわけであるが、要するにその要旨は『自己背着因襲的重擔、肩住了黑暗的閘門、放他們到寬闊光明的地方去；』という數句に歸着されよう。この家庭改革と子女解放は當時の「新青年」が唱えた主なテーマの一つでもあり、やはり『與前驅者取同一歩調的。』（『自選集自序Ⅴ』）ことのあらわれとみられよう。なお、「新青年」（六卷六号）の發行日付は（一九一九年）十一月一日であるので、この「十月」は十一月に訂正すべきであらう。

ついで、『十二月請假經津浦路歸省、奉母偕三弟建人來京。』（『年譜』）とみえる。これを「魯迅日記」に参照すれば、魯迅は十二月一

日北京を發ち、四日紹興に到着。その後、家財道具等の整理をすませて、二十四日紹興を發ち、二十九日北京に着いている。かくて魯迅は郷里紹興の家を清算し、一家眷属を北京に迎えて生活することにしたのであるが、その経緯のあらましを小説『故郷』、『呐喊』等を参照しつつ述べることにする。

その年度末までに家の明け渡しを迫られて久し振りで訪れた故郷は些さかの活気もない荒寥たるただずまいであつた。生家の屋根瓦には一面に枯草のやれ茎がおりからの風になびいており、それは『正在説明這老屋難免易主的原因。』という有様であつた……。おそらく、この北京移住は經濟上の問題が主なる理由の一つであつたろう。かつての祖父の入獄及び父の病氣等に由来すると覺しい家計の逼迫は「呐喊」序などによつても窺われるが、当時紹興の家の生計費が魯迅の送金によつてまかなわれていたことは「魯迅日記」によつても知られる。その理由はともあれ、かつて『連心肝也似乎有些了然』（『瑣記』）「朝花夕拾」と紹興の人々に愛想をつかして南京へ遊学した年（一八九八）から数えれば十三年後になるわけである。

故郷紹興は魯迅の記憶には寧ろ痛ましい想い出にたつた土地ではなかつたろうか。紹興をS城と記し、その名を語つたがらないようににさみえるのであるが、古い封建色につつまれた紹興、その中で没落して行つた彼の家、その過程で受けとめた痛切な印象が常に伏在していたのではないかと思われる。『故郷』の登場人物、閻土あるいは楊二嫂など古い翳の中に亡び行くものとして描かれている。古いものからの脱却と新しい生活への希求、それが故郷紹興をひ

きはらつて北京へ移住する際の魯迅の胸中を去来してやまなかつた感慨であつたろう。

なお、『是年仍搜羅研究拓本。』（『年譜』）とみえるように、依然として拓本の搜集、研究がつづけられていたことは、やはり「魯迅日記」の「書帳」等が参照される。

ついで、一九二〇年（四十歳）。「年譜」にはまず『一月、譯成日本武者小路實篤戯曲一個青年的夢。』とみえる。武者小路原著の「ある青年の夢」の翻訳の経過については魯迅の『後記』があり、就いてみる事ができるが、それによれば、魯迅ははじめ「新青年」誌上に紹介されているのを読み、一九一九年八月二日翻訳に着手し、北京の「国民公報」に連載、その後「国民公報」が發禁になり翻訳を中止したが、十一月に「新青年」の記者にすめられて完訳し、「新青年」七卷二号から四回に分けて連載した、とみえる。

なお、これは後一九二一年十二月に商務印書館から「文学研究会叢書」の一つとして出版された。

この戯曲の主旨は原著者のまえがきによつても知られるように第一次歐洲大戰に際し、人類の運命を憂慮し、反戦平和への念願を訴えるというのである。魯迅は『將他看完、很受些感動……』（『一個青年的夢訳者序』）「魯迅全集補遺続編」と述べ、また『我以爲這劇本也可以醫許多中國舊思想上的痼疾、因此也很有翻成中文的意義。』（『一個青年的夢訳者序』）と述べているが、それは魯迅の外国文学翻訳の基本的な態度を表明するとともに、この翻訳に着手し

た動機をあかしている。さらに、これについて見逃しえないのは、周作人との関係であり、作人は「新青年」(六卷三・一九一九年三月十五日発行)誌上に「日本の新村」(大正七年、武者小路氏が日向に建設した「新らしき村」の紹介)を発表しており、また魯迅の「後記」によれば、周作人は武者小路氏にこの戯曲が翻訳されたことを伝え、同時に中国に住んでいる人間にどういう意見をもっているか述べてくれるよう頼んで返信をえたが、それが訳本の巻頭に附した「与支那未知的友人」(周作人訳)である旨が明らかにされている。ともあれ、魯迅のこの翻訳の背景には周作人の助言が大いにあづかつて力あったものと察せられる。

次に、『十月譯成俄國阿爾志跋綏夫著小説工人綏惠略夫。』(「年譜」とみえる。これを「魯迅日記」に参照すれば、二十二日の条に『譯工人綏惠略夫了共百廿四枚』とあるので訳了は十月二十二日であることが知られる。阿爾志跋綏夫(M. Artsbashev, 1878~1927)の「労働者セヴィリヨフ」(Rabochii Sheverioff)については「譯了工人綏惠略夫之後」があり、就いてみることができる。まず、一九〇五年の革命をはさんで反動と革命力崩壊の時代に生きたアルツィバーシェフについてその作品群をおりまぜて紹介し、これをアナキステックな個人主義(Anarchistische Individualismus)と規定する。ついで、著名な「サーニン」(Sanin)に筆を進め、この小説の中心思想はアナキステックな個人主義であり、個人の幸福と欲求以外の生活上の欲求はすべて虚偽であるところから性欲描写作家として批評家から攻撃された次第を述べる。魯迅は、しか

し、その種の批評は武断であるとし、それは社会背景が生み出した一つの典型的人物であると弁護する。サーニンは、もちろん、現代人の一面であるが、作者は更に重要な一面としてセヴィリヨフを描出したと述べ、彼は絶望的な反抗、苦悶の裡に、いわゆる不幸者達に対しても幸福者に対すると一様に宣戦し、かくして彼の社会に対する復讐が成つた、と論断する。要するに、魯迅は『用了力量 and 意志的全副、終身戦争、就是用了炸彈和手槍、反抗而且淪滅(Untersuchen)』(「譯了工人綏惠略夫之後」)とみるセヴィリヨフに並々ならぬ共感を覚えたのであろう。それはまた反抗と行動の詩人の称揚といふ。かつての「摩羅詩力説」の系譜につらなるものとみることができる。なお、これは翌二十一年七月から十二月まで「小説月報」に連載、ついで二二年に「文学研究会叢書」の一つとして、のち二七年には「未名叢刊」の一つとして出版された。因みに、この翻訳は前記の「譯了工人綏惠略夫之後」によればドイツ語からの重訳であり、S. Bugow と A. Billard 共訳の「革命の物語」(Revolution's Geschichten)に拠ったものであるという。

次に、『是年秋季起、兼任北京大学及北京高等師範學校講師。』(「年譜」とみえる。ここには漠然と『秋季』としてあるが、これを「魯迅日記」に参照すれば、まず八月六日の条に『晚馬幼漁來送大學聘書』とある。馬幼漁は当時の北京大学中国文学系主任教授であり、従つてこの日に彼の手を通じて招聘状が届けられたことが知られる。この招聘状はいま「魯迅生平事述」(北京魯迅博物館編、文物出版社出版)に再録されているが、それは国立北京大学校長蔡元培の署名で、中華民國

九年八月二日の日付けになつてゐる。

なお、『魯迅日記』の記述を参照すれば、實際の出講は、北京大学の場合には十二月二十四日の条に『午後往大學講』とみえるのが最初である。従つて『年譜』の『秋季』は高師の場合についてなお検討すべき余地があろう。

魯迅が北京大学講師を兼任した経緯について周作人は次のように述べてゐる。『豫才因爲古小説の蒐集、後來能有夠有小説史的著作、説起緣由來很有意思。豫才對於古小説雖然已有十幾年用力（其動機當然還在小時所讀的書裏）、但因爲不喜誇示、平常很少有人知道。那時我在北京大學中國文學系做「票友」、馬幼漁君正當主任、有一年叫我講兩小時的小説史、我冒先的答應了回來、同豫才説起、或者由他去教更爲方便、他說去試試也好、於是我去找幼漁換了別的什麼功課、請豫才教小説史、後來把講義印了出來、即是那一部書。』（△關於魯迅V）

すなわち、これによれば、始め馬幼漁教授から周作人に中国小説史の講義の依頼があつて引き受けたが、かねてこの方面に造詣の深い魯迅こそ適任であると考え、話合ひの上魯迅の承諾をえて推薦した、というのである。魯迅の教師の経験は勿論これが始めてではない。しかし、このたびは五四運動の発源地として中國文化革命の先頭をきつた北京大学であり、革新の担い手である若い学生を前に講壇に立つたということは魯迅の人生路線にとつて重要な意義を持つものであるといえよう。当時北京大学の学生であり、直接魯迅の講義を聴いた王魯彦はその模様を次のように述べてゐる。『他叙述着

極平常の中國小説史實、用着極平常の語句、既不贊譽、也不貶毀。然而、教室里却突然爆發笑聲了。他的每句極平常的話幾乎都須被迫地停頓下來、中斷下來。每個聽衆的眼前赤裸裸地顯示出了美與醜、善與惡、真實與虛偽、光明與黑暗、過去現在和未來。大家在聽他的中國小説史的講述、却彷彿聽到了全人類的靈魂的歷史、每一件事態的甚至是人心的重重疊疊的外套都給他連根撕掉了。于是教室里的人全笑了起來、笑聲里混雜着歡樂與悲哀、愛戀與憎恨、羞慚與憤怒……于是大家的眼前浮露來了一盞光耀的明燈、燈光下映出了一條寬闊無邊的大道……大家抬起頭來、見到了魯迅先生的蒼白冷靜的面孔上浮動着慈祥親切的光輝、像是嚴冬的太陽。但是教室里又忽然異常靜默了、可以聽見脈搏的擊動聲。魯迅先生的冷靜蒼白的臉上始終不會露出過一絲的微笑。』（△活在人類的心里V）（魯迅）

かつての紹興中學校における『嚴厲教師』の面影がここまで持ち越されている思いがあるが、ともあれ、『坐滿了講堂』（陳学昭△回憶魯迅先生V）「憶魯迅」という学生を前に恂々と小説史を講ずる彼の風格が彷彿として浮んで来る。やはり北京大学の学生で、魯迅の講義を直接聴いた一人である尚鉞は『在「中國小説史略」中、先生給了我對社會和文學的認識上一種嚴格的歷史觀念、使我了解了每本著作不是一種平面的敘述、而是某個立體社會的真實批評、建立了我此後寫作的基礎與方向。』（△憶魯迅先生V）「憶魯迅」と、その感銘のほどを洩らしている。

彼の創作の筆はこの年も快調なペースで進められた。すなわち、六月には△明天V（『新潮』月刊二卷一號）、<sup>(23)</sup>七月には△一件小事V、<sup>(24)</sup>

十月には「人頭髮的故事」(『時事新報』副刊「学燈」)及び「風波」(『新青年』八卷一号)を発表した。それぞれの作品の紹介等については一九二三年「呐喊」出版の項にとりまとめて述べることにする。

次に、『是年仍研究金石拓本。』(『年譜』)とみえるが、この年も依然として金石拓本の研究がつづけられたことは、やはり「魯迅日記」の「書帳」等を参照することによつて傍証される。

さて、この年の特記すべきこととして文学研究会の成立があり、これと魯迅との関係について一言しなければなるまい。文学研究会はこの年十一月、北京に成立した文学結社であり、その發起人には周作人、鄭振鐸、沈雁冰(茅盾)、葉紹鈞、孫伏園等計十二名が名を列ねている。その宣言は周作人が推されて起草したが、(一)會員相互の聯絡、(二)智識の増進、(三)著作家組合の設立の三条に要約される。その主なる機関誌は当時新らしく改組され、沈雁冰が主編者となつた「小説月報」であり、その編集要項には西欧名著の翻訳、創作の提唱、写実主義の提唱、人生の爲の芸術の主張及び被压迫民族、弱小民族文学の紹介等があげられている。以上の文学研究会の宣言及びその主要機関誌「小説月報」の編集要項等によつても窺えるのであるが、この研究会は決してある特定の主義主張を中心に結成されたものではなく、寧ろ新文学建設の基盤としてその名の示すようにひろく文学の研究、ひいては旧文学の整理及び外国文学の紹介等にも当らうという、いわば文学を中心とする同業組合的な機関として誕生したものである。そのようにして生れた文学研究会と魯迅との関係は少くとも客観的には極めて密切であり、当時作家とし

ての地歩をようやく固めつつあつた時でもあり、かつ發起人の多くのメンバーが特に関係の深い人々であり、また「小説月報」の寄稿者であるとともに「文学研究会叢書」にも参劃している等々を併せ考えれば彼がこれに加入すべきは当然とみられ易い。また、翌一九二一年に結成され、文学研究会と激しく対立した創造社の主なる攻撃目標が魯迅であつた点からしてもそうである。魯迅は、しかし、

文学研究会所屬會員ではなく、これと直接的な関係はない。とはいえ、魯迅は勿論文学研究会に不賛成であつたというのではなく、寧ろこれと極めて近い立場にあつたことは、たとえば、『説到「爲甚麼」做小説罷、我仍抱着十多年前的「啓蒙主義」，以爲必須「爲人生」，而且要改良人生。』(『新文学大系小説二集序』)且介亭雜文二集と述べていることから察せられる。つまり、この「人生のため」というのは文学研究会が標榜した「人生のための芸術」と一致するわけである。また、さらにつづけて、『我深惡先前的稱小説爲「閒書」，(同)と述べているが、この「閒書」云々は「文學研究會發起宣言」に「將文藝當作高興時的遊戲，或失意時的消遣的時候，現在已經過去了。」とあるのと軌を一にする。魯迅のこの序は一九三三年執筆のもので、従つて『十多年前』というのはこの當時のことを指しているものとみて差支えない。おそらく魯迅は文学研究会成立當時を念頭において書いていたのであり、その立場の類似がおのずからに表白されたものと考えられる。そのような密切な関係にもかかわらず、なぜ魯迅がそのメンバーに名を列ねなかつたの理由は不明であり、またその種の詮索は大して意味のないこととも思われるが

要するに、魯迅の内面においてその必然性が確信にまで昂められていなかったという外はあるまい。強いて言うならば、それは文学革命或いは五四運動と魯迅との関係の延長であり、彼は少くとも形式的にはあえていかなる運動の先頭に立つことはしなかったが、「新青年」の編集にタッチし、わけても「狂人日記」以下の実績によって文学革命の勝利を裏づけるとともに終局的には『文化新軍の最偉大和最英雄的旗手。』（毛沢東「新民主主義論」）となりえた、そのような魯迅のありかたと相互連関的に理解されなければならないであろう。

### (三) △阿Q正伝V—創造社—エロシエンコ

ついで、一九二二年（民国十年）。この年の「年譜」にはまず『二三兩月又校愁康集。』とみえる。「愁康集」の校勘についてはかつて別稿<sup>(28)</sup>において述べたが、これを「魯迅日記」に参照すれば、二月十二日、三月二、八、二十日の条にそれぞれ校勘のことが記されている。なお、「魯迅日記」のこの前後にとくに目立つのは小説関係書を数多く購入していることで、たとえば「宋人小説十五種」（二月六日）、「漢宋奇書」（二・十四）、「水滸畫譜」「忠義水滸傳」（二・十六）、「宣和遺事」（二・二十二）、「宋人説部書四種」（三・十）、北齊の「水滸書傳」（三・十四）、「拾遺記」「搜神記」（三・十七）等がみえる。これはおそらく、「年譜」の次条にも『仍兼任北京大學、北京高等師範學校講師。』と記されているように、主として中国小説史講述のためであつたろう。

この年、魯迅は注目すべき二篇の小説を発表した。△故郷V及び△阿Q正伝Vがそれであるが、前者はしばらく「呐喊」出版（二九二三）の項にゆずり、以下△阿Q正伝Vについて述べることにする。△阿Q正伝V<sup>(29)</sup>は魯迅の代表作として著名な作品であり、すでに諸外国にも紹介され、邦訳も数種を下らない。この中篇小説が成るまでの経過は彼自身の△阿Q正傳的成因V（『華蓋集続編の統編』）があるが、いまそれに拠つてまとめればあらまし次のようになる。

当時孫伏園が編集していた「晨報副刊」に週一回「開心話」という欄が設けられ、魯迅は孫伏園のすすめでその欄に巴人<sup>(30)</sup>というペンネームで書くことになった。△阿Q正傳V全篇の構成が不均衡なのは発端（第二章序）が「開心話」（ざつくばらんうさ晴らしの話）という欄名にひきずられてなくもがなの滑稽といひ加減につけ足したためである、という。当初はそんな気持で書き始めた魯迅も徐々に気まじめになり、従つて第二章からは「新文芸」欄に掲載されることになった。『我的文章不是湧出來的、是擠出來的。』（同）と述べているように、毎週或いは隔週のこの執筆には彼も相当に腐心したらしく、その結末を急いだ、たまたま伏園が留守をし、代理人（何作霖）に原稿を手渡すことになったので、最後の一章を△大團圓Vにまとめて結局をつけてしまった、というのである。△阿Q正傳Vはそのような経過を辿つて完成したのであるが、要するにそれは、辛亥革命を背景に阿Qという犠牲者の生息を諷刺的な筆致の中に深い憂愁と愛着をこめて描きあげた作品ということになる。阿Qはいわばルンペン農民で愚弱なくせに空威張りし、負けた場合は相手

を見下すか或いは自分が譲つてやつたからと自惚れ、相手が弱いとみると徹底的にいじめ抜き、馬鹿騒ぎが好きで、折からの革命熱に浮かれ、暴動の一味と間違いられてうやむやの裡に処刑される。この阿Qという愚かにも哀しい人物は中国の封建植民地社会が生んだ一つの典型像であるとともにひろく人間性に内在する奴隷性の象徴ともみられよう。阿Qという人物に含まれるそのような性格は、たとえば高一涵が『……我記得當阿Q正傳一段一段陸續發表的時候，有許多人都慄慄危懼，恐怕以後要罵到他的頭上。並且有一位朋友，當我面說，昨日阿Q正傳上某一段彷彿就是罵他自己。因此便猜疑阿Q正傳是某人作的，何以呢？因為祇有某人知道他這一段私事。……』後此疑神疑鬼，凡是阿Q正傳中所罵的，都以為就是他的陰私；凡是與登載阿Q正傳的報紙有關係的投稿人，都不免做了他所認為阿Q正傳的作者嫌疑犯了；等到他打聽出來阿Q正傳的作者名姓的時候，他才知道他作者素不相識，因此才恍然自悟，又逢人聲明說不是罵他。』（『現代評論』四卷八十九期）と述べているような、つまり阿Qという鏡に映し出されるみずからの影に脅えるていの一種の悲喜劇を生む原由ともなつた。尤もそれはまた中国における小説の読まれ方の問題<sup>33</sup>が大いに作用しているのではあるが。ともあれ、阿Qはいわば中国民族のもつよろろの欠陥を集約した一つの類型である。それ沈雁冰（茅盾）は『作者の主意、似乎祇在刻畫出隱伏在中華民族骨髓裏的不長進的性質——「阿Q相」。』（『吶喊』V——李何林編『魯迅論』）と呼んでいる。ところで、周遐寿はこの阿Qの実在のモデル的人物として阿有の弟の阿桂をあげ（『阿有与阿桂』——魯迅的故家）、ま

た喬峯（周建人）もこの兄弟の名をあげ（但し、ここでは阿貴となつてゐる）、『Q字は貴字拼音の第一個字母、「阿Q正傳」的作者借用了這Q字。』（『阿Q時候的風俗人物一斑』——略講關於魯迅的事情）と述べている。この点からすればこの阿桂（或いは阿貴）が阿Qの素朴なモデルであることは認められよう。しかし、それはあくまでも阿Qという人物を創造するための便宜的な素材であるにすぎず、阿Qがさらに普遍的な民族的欠陥を集約した典型像であること言うまでもない。喬峯もこれに関して『「阿Q正傳」不是一個實實在在的個人的照相，是觀察了許多人之後，熔和之後塑成功的形像，是創造過的。』（同）と述べている。さて、そのような阿Qはもちろん卒爾として形象されたものではない。阿Q的性格、つまり中国民族性の欠陥については、すでに別稿<sup>34</sup>において述べたように一九〇二年日本留学の当初、友人許寿裳とその問題について語り合つた頃から彼の胸中に蟠まり、徐々に積みかさねられたものであつて、年代の経過からいえば、数えて十九年後に始めて阿Qという人物にまで形象化されたわけである。

そのような阿Qの性格の根幹をなすものはなにか？これを端的に表明することは必ずしも容易でないが、ここでは作品に即してやはり『精神勝利法』をあげよう。精神勝利法は阿Qのとする常套手段であり、相手が弱いとみれば徹底的にいじめ抜きが、反対に相手が強力であり、自分の敗北を認めざるをえない場合には相手を自分以下に見下すか或いは自分があえて譲つてやつたからと自惚れる、そのような精神の所在をいう。かくて、阿Qは絶対不敗なのであるが、

しかし、これは所詮愚かしくも哀しい自己欺慥でしかなく、いわば奴隸性の表現に外ならない。この奴隸性を自覚し、自欺を克服しない限り、阿Qに救いはない。普言すれば、そのような精神を脱却しない限り中国に救いはなく、革命（辛亥）も単なる看板の塗り換えにすぎず、果てしない停滞、混迷をつづけるのみである。前述の、茅盾のいう『隠伏在中華民族骨髓裏的不長進的性質——阿Q相』はここに関連するであろう。魯迅にとつて阿Qは否定さるべきものであり、その精神勝利法は中国民族の劣根性として克服さるべきものであること言うまでもない。それを典型として形象化した魯迅は、はじめ阿Qを愚かなるもの、笑うべきものとして、寧ろ諧謔的に描いて行つた。しかし、回を進め、章を重ねるにつれて描かれた阿Qは逆に作者魯迅を制約し、苦しめた。そのような反覆は前に述べた執筆の経過及び作品自体を読みほぐすことによつて理解されよう。つまり、中国民族の劣根性の典型たる阿Qは作者の描く客観であると同時に民族の一人である作者の主観にまで転換する。かくて阿Qは外にあるものではなく内にあるものに変貌し、魯迅の精根と阿Qの魂が不時に合致する。その時、阿Qの周辺にはしみじみとした哀感とうつろな笑いが去来する。△阿Q正傳▽が単なる諧謔小説の域を超えて、つまり、作者の執筆当初の予期に反して、その代表作となりえた理由の大半はおそらくここにあるのではなからうか。

なお、魯迅はこの年十月十日発行の「小説月報」（十二巻十号・被損害民族的文学号）に△近代捷克文学概観▽及び△小俄羅斯文学略説▽を唐俟という筆名で記載した。前者はチェッコの凱拉綏克（Josef

Karasek）原作「斯拉夫文学史」第二冊第十一、十二節と十九節の一部を訳出したものであり、後者はドイツの凱爾沛来斯（G. Karpeles）原作「文学通史」の中から訳出したもので、内容はその発生から十九世紀末の小俄羅斯文学の大略である。<sup>36</sup>

さて、この年の特記すべきこととして「創造社」の結成がある。

その経過については郭沫若の「創造十年」に詳しい。当時日本に留学中であつた郭沫若（九大医学部）、郁達夫（東大経済学部）、成仿吾（東大工学部）、田寿昌（東京高師）等が中心となり、前々から文学運動についての談合があり徐々にその機運が熟しつつあつたが、七月初旬東京の郁達夫の下宿に会合、その席上で創造社結成がとりきめられた。<sup>37</sup>この結成の背景については、たとえば郭沫若が田寿昌にあてた手紙（一月十八日付）の一節に『……他（成仿吾——筆者）的來信上説；「新文化運動已經開了這麼久，現在國內雜誌界底文藝，幾乎把鼓吹的力都消尽了。我們若不急挽狂瀾，將不僅那些老頑固和那些觀望形勢的人要囂張起來，就是一班新進亦將自己懷疑起來了。」他這個意見，我很具同感，所以創刊底建議，我也非常贊成，不消說我們創刊雜誌另外還有多大的目的和使命了。』（「創造十年」）とあるのが参照されよう。すなわち、一九一九年の五四運動以來急激に進展した『國內雜誌界の文藝』もこの頃には『殆んど鼓吹力をなくし』、停頓状態におち入つたと観取されたのであり、これを放置すれば逆コースを辿つて『新進の人々までが自己懷疑におち入つてしまふ』疑懼が感知されたわけである。これはいわゆる「五四退潮期」に対する若い鋭敏な触覚がとらえた反応である。そのような国内新文化の

動向に対する不満と疑懼の焦点をしなければ、直接的にはやはり魯迅をも含めての文学研究会への反撥としてそれは採り上げられよう。

その具体的な現われは、たとえば、「創造季刊」の予告にみえる『有人輦斷文壇』という表現である。これに対しては魯迅も『創造社尊重天才、是藝術至上派、尊重自我、崇創作、恨翻譯、尤憎恨重譯、與同時在上海的文学研究會相對立。其出陣最初之廣告上、言有輦斷文壇者、即指文学研究會也。』（上海文芸之一瞥Ⅴ―「二心集」）と述べているが、創造社と文学研究会、或いはその頂点としての魯迅との対立の発端がすでにそこにみられる。ともあれ、創造社は翌一九二二年、上海の泰東書局から機関誌「創造季刊」を発刊し、北京の文学研究会と南北に対峙して論戦を交えることになるわけである。文学研究会はその名のごとく研究的な態度を持し、漠然と人生のための芸術を唱えたのに対して、創造社はその名にふさわしくひたすら新らしきものの創造を目指し、芸術のための芸術を標榜した。しかも、そのメンバーのいずれもが浪漫主義的傾向のゆたかな若々しい情熱にもえる人達であつただけに当時の青年層に反響、共鳴を呼んで、むしろ微温的ともいえる文学研究会を凌駕するほどの勢いを示したのであつた。

ついで、一九二二年（四十二歳）。この年の「年譜」にはまず『二月八月又校嵒康集。』とみえる。この年の「魯迅日記」はすでに別稿において述べたように欠本となつていたので、いまは参照すべくもないが、ともあれ「嵒康集」の校合は一九一三年十月以来おりに

ふれて続けられて来たものであり、魯迅のこの工作に対する熱意のほどが汲み取れよう。

次に、『五月譯成俄國愛羅先珂著童話劇桃色的雲。』とみえる。

魯迅は、エロシエンコ (Vasely Eroshenko) を識り、「桃色的雲」を翻譯するに至つた経緯を次のように述べている。『當愛羅先珂君在日本未被驅逐之前、我許不知道他的姓名。直到已被放逐、這才看起他的作品來；所以知道那迫辱放逐的情形的，是由于登在《讀賣新聞》上的一篇江口渙氏の文學。于是將這譯出，還譯他的童話，還譯他的劇本《桃色的雲》。其實，我當時的意思，不過要傳播被虐待者的苦痛的呼聲和激發國人對於強權者的憎惡和憤怒而已，並不是從什麼『藝術之宮』裏伸出手來，拔了海外的奇花瑤草，來移植在華國的藝苑。』（《雜憶Ⅴ―墳》）

ここにみえる、読売新聞に發表した江口渙氏の文章というのは、大正十年（一九二〇）六月十七日の同紙文芸欄に掲載された《エロシエンコ・ワシリイを憶ふ》を指す。これは後に「最後の溜息」が東京叢文閣から出版（編者・秋田雨雀）された時（一九二二年十二月）の序文に附したものであるが、魯迅はこれを翻譯して（《憶愛羅先珂華希理君Ⅴ》、「愛羅先珂童話集」<sup>40</sup>）に載せている。この文章にはエロシエンコが辱しめられ放逐される状況がかなり詳細に明かされているが、いまこれを基底にその他を參照して述べればあらまし次のようになる。

ロシヤの盲目詩人エロシエンコが愛用の六絃琴を携えて始めて日本を訪れたのは一九一四年四月であつた。その後、東京の友人達と

親交をつづけ、ついでビルマ、インドを放浪し、一九一九年七月再び東京に舞い戻った。東京でエロシエンコを世話した人々の中に新宿中村屋店主相馬愛蔵、黒光夫妻があつた。とかくする中、エロシエンコは日本の社会主義者、アナキストとロシアのそのの連絡者であり、ボルシエビキから宣伝資金を得ているという嫌疑をかけられ、一九二一年五月二十八日、国外追放命令を受けた。その夜、彼を淀橋署に連行するために四人の特高が中村屋を訪れた。店主相馬氏のとりなしで始めは強制の様子もみえなかつたが、やがて十一時過ぎ、正服及び私服の警官三、四十名が靴のままなだれ込み、極度の恐怖におびえるエロシエンコに襲いかかり、そのまま街路をひきずつて署へ連行した。検束後、相馬氏他二名以外は面会を禁止され親友の秋田雨雀氏も許されなかつた。かくて嫌疑の果てはその盲目にまで及ぶなど種々の虐待を受けたが、ついに六月三日敦賀の港から鳳山丸に乗船、日本を去つた。ついで、ウラジオストクに着いたが入国拒否の憂目にあい、八月末にハルビンに辿り着いた。ここでは中根弘氏の宅に居たが一カ月足らずで上海のエスペランチスト胡愼之をたよつて十月一日、霧の深い夜に上海へ赴いた。<sup>(43)</sup>なお、江口渙氏はエロシエンコをアナキスト・コスモポリタン・詩人・音楽家・童話作家と規定し、彼の住む世界は、しかし、全く現実の世界ではなく、美しい未来の国、ユートピア・自由郷であり、童話の詩の世界に近い、と言ひ、彼のアナキズムとコスモポリタニズムは、つまり、この美しい、詩の世界から生み出されたもの以外ならぬであらう、と述べているが、ともあれ、魯迅は以上のよ

うな日本官憲によるエロシエンコ虐待に憤りを覚え、彼の作品を翻訳することによつて『被虐待者の苦痛の叫びを伝えるときに國人の、強権者に對する憤怒を激發しよう』としたわけである。もちろん、エロシエンコの作品そのもののへの感銘もあつたことは、たとえば、魯迅が翻訳に際して記した序文及び訳後附記等によつて充分に窺えるが、少くとも前引の△雜憶Ⅴには当時の感慨をそのやうに述べているわけである。なお、周遐寿は『大概一九二一年的冬天、他被日本政府驅逐出國、來到上海、第二年春天應北京大學之招、擔任教世界語、於二月廿四日到北京來。』（△愛羅先珂Ⅴ―「魯迅小説裏的人物」と述べ、エロシエンコがこの年北京大學に招かれエスペラントを担任したことを伝えている。<sup>(44)</sup>

さて、この年十二月に發表した△鴨的喜劇Ⅴ（『婦女雜誌』八卷十二号）はこのエロシエンコを主人公にした作品である。それは、色々な小動物を愛するエロシエンコは北京の砂漠のような寂寥からおたまじやくしを手に入れ蓮池にかつていたが、たまたま買つた家鴨の雛に食われてしまうというストオリーである。しかし、そのストオリーよりも寧ろロシアの亡命詩人を庇護する作者の家庭と小動物達の生態との交流からにじみ出るほのぼのとした雰囲気をもごとに結晶させた好短篇といえよう。なお、これは『現在又從夏末交了冬初、而愛羅先珂君還是絕無消息、不知道究竟在那里了。只有四個鴨、卻還在砂漠上「鴨鴨」的叫。』という結びで終っているが、これについて周遐寿は『七月三日出發、經過蘇聯至芬蘭首都、赴第十四次萬國世界語大會、至十一月四日才又回來。本文作於一九二二年

十月、正是他豫定的期日已過、大家疑心他不再來了的時候、所以有點給他作紀念的意思的。』（△愛羅先珂▽「魯迅小説裏的人物」）と述べている。つまり、この二つを対照すれば、この短篇の背景が理解されるとともに魯迅がエロシエンコの身を案じ、彼を紀念する意図のあつたことが首肯されよう。

この△鴨の喜劇▽以外に、七月に△白光▽（『東方雜誌』十九卷十三号）、九月に△端午節▽（『小説月報』十三卷九号）、十月に△免和猫▽（『晨报副刊』）、十二月に△社戲▽（『小説月報』十三卷十二号）等を発表しているが、その紹介等については「呐喊」出版の項（一九三三）にゆずる。

次に、「年譜」に『仍兼任北京大學、北京高等師範學校講師。』とみえるように、この年も前年にひきつづきそれぞれ講師を兼任した。

#### （四）周作人との決裂——「呐喊」・「中国小説史略」

ついで一九三三年（民國十二年）。この年六月に「現代日本小説集」が出版（『世界叢書』・商務印書館）された。これは周作人との共訳であるが、魯迅訳は夏目漱石△掛幅▽（△懸物▽）及び△克萊喀先生▽（△クレイグ先生▽）、森鷗外△遊戯▽（△あそび▽）及び△沈黙之塔▽（△沈黙の塔▽）、有島武郎△与幼小者▽（△小さき者▽）及び△阿末的死▽（△お末の死▽）、江口渙△峽谷の夜▽（△峽谷の夜▽）、菊地寛△三浦右衛門の最後▽（△三浦右衛門の最後▽）

及び△復讐的話▽（△ある敵討の話▽）、芥川龍之介△鼻子▽（△鼻▽）及び△羅生門▽（△羅生門▽）の計十一篇である。魯迅が現代日本文学の中からこれらの作家及び作品を選出したことについては、やはりそれなりの根拠、基準があつたものと当然に考えられる。これについては卷末に附した△關於作者的説明▽があり、就いてみる事ができるが全般的に言えば魯迅はまずなによりも作家の『創作的態度』を問題にしていることが観取される。ひろく日本文学の魯迅文学に対する影響といふことになれば、やはり漱石、鷗外を第一に挙ぐべきであろうが、これについては△我怎麼做起小説來▽（『南腔北調集』）に述べられていること及び周作人が魯迅の嘲風中の軽妙な筆致に漱石の影響を指摘している（△關於魯迅之二▽）<sup>46</sup>と等、すでに別稿<sup>46</sup>において述べたが、この△關於作者的説明▽の中では△坊ちゃん▽△我輩は猫である▽等を通して『輕快洒脱、富于機智、是明治文壇上的新江戸藝術的主流、當世無與匹者』と述べ、いわゆる『低徊趣味』『余裕のある文学』をとらえている。ついで鷗外についてはヨオロッパ文芸の紹介者としての功績をたたえ、その創作態度を表明する一例として△杯▽（Sakazuki）における寓話をあげている。つまり、七人の娘達はめいめい『自然』の二字を雕つた銀杯で水を飲むが、八番目の娘は熔鑠色の小杯で飲む、七人はそれをみて軽蔑し、怒んで、あたいのを借そうか知ら、と一人がいう、八番目の娘の閉じた口がその時ひらいて、“MON, VERRE, NEST. PAS. GRAND. MAIS. JE. BOIS. DANS. MON. VERRE”（あたくしの杯は大きくはございません。それでもわたしはわた

くしの杯で戴きます。と答える、というのである。この銀杯に雕られた『自然』の二字はおそらく当時の日本文壇を風靡した自然主義を意味するものであり、この寓話は鵲外の自然主義文学に対する独自の旗幟の宣明と読みとれるのであるが、魯迅はその選択の中にこの種の作品を全く採用していない。これはまた魯迅の日本自然主義文学に対する批判の傍証とも受取れるであろう。そのような批判は、或いは、ここに訳した△沈黙の塔▽に『自然主義といふものの内容で、人の目に附いたのは、あらゆる因襲が消極的に否定せられて、積極的には何の建設せられる所もない事であつた。此思想の方嚮を一口に言へば、懷疑が修行で、虚無が成道である。云々。』（傍点筆者）と述べる鵲外の批判に対する共感またはその影響等が窺われ（たとえば、『呐喊』序との対比）、また白樺派の有島武郎の著作集を読み、△小さき者へ▽を△随感録六十三・與幼者▽（『熱風』・一九一九年）として紹介しているのであるが、ここではしばらく指摘だけにとどめておく。

ついで、『年譜』には『八月遷居鵲塔胡同六十一號。』とみえる。魯迅が故郷紹興の家を清算し、北京の公用庫八道湾の家屋を買い、家族を迎えて住んだのは前述のように一九一九年であつた。その八道湾の家からいま鵲塔胡同に移居するについてはそれなりの理由のあつたことが当然に考えられるわけであるが、まずこれに触れたものとして許寿裳の述べる次の一節があげられる。『作人的妻羽太信子是有歇斯臺理性的。她對於魯迅、外貌恭順、内懷忮忌。作人則心地糊塗、輕聽婦人之言、不加體察。我雖竭力解釋開導、竟無效果。』

致魯迅不得已移居外客廳而他總不覺悟；魯迅遣工役傳言來談、他又不出來；於是魯迅又搬出而至鵲塔胡同了。從此兩人不和、成爲參商・一變從前「兄弟怡怡」的情態。』（△西三条胡同住屋▽「亡反魯迅印象記」）

これによれば転居の主な理由は周作人夫妻との不和ということになる。魯迅と周作人夫妻との間に生じた不和が具体的に何であつたかについては魯迅も伏せており不明であるが、ただ許景宋が魯迅が語つた言葉として『我是被家裏的日本女人逐出的。』（『欣慰的紀念』）と述べているところから作人の妻羽太信子氏がその主流に介在したらしいことは略々察しがつく。また、この不和がおよそ七月頃から始まつたらしいことは、たとえば『魯迅日記』七月十四日の条に『是夜始在自室喫飯自具一看此可記也。』とみえることによつて窺われるが、ついで七月十九日の条には『上午啓孟（作人筆名）自持信來、後邀欲問之、不至。』とみえる。周作人が持参したこの書面の内容に触れて許景宋は『在信封外面寫着“魯迅先生”，在裏面斬釘截鐵地要魯迅“以後請不要到後邊院子里來”！』（△所謂兄弟▽「魯迅回憶錄」）と記しているが、とすれば、これは、つまり、絶縁状とも受取れるわけである。ついで七月二十六日の条には『上午往鵲塔胡同看屋。下午收拾書籍入箱。』とみえ、すでに移転家屋の下検分をし、書物の整理に當つていたことが知られる。ついで八月二日の条には『下午携婦遷居鵲塔胡同六十一號。』とみえ、この日に妻朱氏を伴つて転居したことが知られる。尤もこの鵲（磚に同じ）筆者、塔胡同六十一号の家は翌一九二四年五月に西三条胡同に移るまでの

いわば急場しのぎであつたことは、転居後に彼が各処に家を探している（『魯迅日記』参照）ことで知られる。

次に、『九月小説第一集呐喊印成。』（『年譜』）とみえる。これを「魯迅日記」に参照すれば、八月二十二日の条に『…晚伏園持呐喊二十冊來』とあり、また、『魯迅全集』1（人民文学出版社版）のA第一卷説明Vにも『初版包括小説15篇・1923年8月由北京新潮社出版、……』とみえるので、この『九月』は八月に訂正すべきであると思われる。さて、この第一小説集を出版するについての魯迅の抱負ともいふべきものは、その題名にも集約されているが、これに関連して彼は次のように述べている。『在我自己・本以爲現在已經並非一個切迫而不能已于言的人了、但或者也還未能忘懷于當日自己的寂寞的悲哀罷、所以有時候仍不免吶喊幾聲、聊以慰籍那在寂寞裏奔馳的猛士、使他不憚于前驅。』（『呐喊』序）これはこの小説集の題名を呐喊とした説明でもあるが、『寂寞の中を突撃している猛士をいささかなりとも慰め、憚るところなく先頭を疾驅してもらうように願つた。』という表明の中に魯迅の抱負、感懷が汲み取られる。この猛士というのは直接的には勿論旧い伝統に挑戦する新青年一派を指すのであろうが、魯迅はそれら革新者達に対する共鳴と接護の氣持を「呐喊」の出版に託しているわけである。そのようにして世に出た「呐喊」がその特異斬新なスタイルと相俟つて、わけでも若い読者層にいかにも歓迎されたかについては、たとえば「魯迅論」（李何林編・北新書局）等に記録があり、就いてみる事ができるが、ここでは沈雁冰（茅盾）が『……在中國新文壇上、魯迅君常常

是創造「新形式」的先鋒；「呐喊」裏的十多篇小説幾乎一篇有一篇新形式、而這些新形式又莫不給青年作者以極大的影響、必然有多數人跟上去試驗。』（『呐喊』魯迅論）と述べ、この小説集の先驅的意義を稱揚している一節をあげるにとどめる。

さて、「呐喊」には現在A狂人日記V等計十四篇の小説が収録されているが、この中、A狂人日記V A阿Q正傳V A鴨的喜劇Vについてはそれぞれ前述したので、以下その他の作品をとりまとめ紹介しておく。

A孔乙己Vは清末を背景に、氣位の高い、しかし無能な讀書人孔乙己の惨めな落魄の生涯を居酒屋のボーイの目を通して描いた短篇であり、そのモチーフは或いは彼が激賞してやまぬ「儒林外史」等からの暗示かとも思われるが、とくに驚嘆に値するのはその文体である。A狂人日記Vのそれをかりに中間的とすれば、これは、彼が好む魏晉の文体の凝鍊を実証するが如く一字一句の増減を許さぬまでに高い完整度を示している。A藥Vの背景もやはり清末のある田舎町である。肺病を治すには人間の血を含んだ饅頭を食わせるという迷信があり、茶店の主人がそれを試みるが息子はそのまま死んでしまう。その息子の母と死刑に処された若い革命家夏瑜の母が墓の前で邂逅する。革命家のその墓には紅白の花が輪をなしている。民衆のために流した革命家の血が逆に民衆を不幸におとし入れる迷信に利用される。その救いようのない暗さは、まさに彼のいう『安特萊（L. Andrev）式的陰冷』（A中国新文学大系・小説二集序V）にみちている。なお、死刑になつた若い革命家になくもがなの花の輪をお

いたのは『曲筆』（『呐喊』序）であり、それは『因爲那時的主將（『新青年』の主編者陳独秀を指す―筆者）是不主張消極的。至于自己，却也並不願將自以爲苦的寂寞，再來傳染給也如我那年青時候似的正做着好夢的青年。』といい、つづけて『這樣說來，我的小説和藝術的距離之遠，也就可想而知了。』（同）と述べている。これは「呐喊」に含まれる小説すべてに対する彼の謙称であること言うまでもないが、ともあれ、「新青年」をめぐる『對於熱情者們的同感』（『自選集自序』―『南腔北調集』）から『于是刪削些黑暗，裝點些歡容，使作品比較的顯出若干亮色』（同）と述べているように、多少のデフォルメがとくに初期の作品に点在することは事実であらう。『明天』の背景は魯迅の咸亨酒場周辺である。病める子を抱えた寡婦單四嫂子は途方にくれるあまり何小仙に診てもらうが、病児はついに死亡、彼女が明日にかけた期待はむなしく裏切られる。彼女は亡児がせめて夢にでも現われてくることを願いながら睡りに入る。<sup>(52)</sup> 隣家の咸亨には赤鼻の老拱、青皮の阿五らが相も変らず明日のない今日を生きつづけている。全篇を蔽う色彩は暗い。その中に描かれた迷信と漢方医に対する不信は前作『藥』からの延長であらう。『一件小事』は全篇僅かに八百七十七字、彼の小説中の最短篇であるが、その意義はかなりに重要である。それは魯迅の、いわば人民への信頼と自己解剖が始めてやや積極的なかたちで提出されているからである。北風のすさぶある朝、「私」は人力車を走らせる。途中、突然に車の棍棒に触れて負しい身なりの老婆が倒れる。老婆の作為を感じた「私」は焦らただしく車夫をせき立てる。車夫は、しかし、

車上の客（『私』）の言には耳を借そうともせず、老婆を親身に介抱し、その腕を支えながら派出所へ送つて行く。その背景を茫然と見送る「私」は名状しがたい感動に打たれるとともにおのれの卑小さが羞らいとなつてはね返えつてくる。この小さな出来事が北京在住六年間のいかなる国家の大事件よりも「私」に痛烈な印象をとどめしかも、それを想い出すたびに勇氣と希望が湧き上つてくる、というのである。<sup>(53)</sup> 『頭髮』の故事は辯髪にまつわる種々のエピソードを辛亥革命以来の政治局面にからませた作品である。政治の変革は少くとも人民の生活には係わりがなく、人民にとつてとやかく物議の種になるのは辯髪の有無である。外国留学以来今日までそれによつて惹き起された種々の体験を諷刺まじりに悲憤をもつて語るNの言葉はそのまま魯迅の述懐である。なお、たまたま十月十日（雙十節）のカレンダーをめくつて『多少故人的臉、都浮在我眼前。幾個少年辛苦奔走了十多年，暗地裏一顆彈丸要了他的性命；幾個少年一擊不中，在監牢裏身受一個多月的苦刑；幾個少年懷着遠志，忽然蹤影全無，連屍首也不知那裏去了。……他們都在社會的冷笑惡罵迫害傾陷裏過了一生；現在他們的墳墓也早在忘却裏漸漸平塌下去了。我。不堪紀念這些事。』という述懐は、紀念すべき日に本當に紀念さるべきものが忘却の彼方に捨て去られている現実に対する批判であるとともに、おそらくは革命の波のあいまに没して行つた彼の友人達（たとえば徐錫麟、秋瑾女士……など）及び同世代の犠牲者達に対する悲憤の表白であらう。竹内好氏のいう、魯迅の生涯につきまとう贖罪（魯迅「世界評論社版」）とはそのような精神の所在を指すので



々の不安に脅えながらも結局は曖昧模糊たる日々の明け暮れに終つてしまふ。この方玄綽はいわば当時の退嬰的なインテリの典型像として描かれているのであるが、その感銘度は封建的なものの抉剔を意図した従来の作品群に比して浅い。なお、この小説の素材の一つである、方玄綽がそのために困惑した俸給の欠配、遅配が当時の魯迅の経済生活の実体を基礎にした描写であることは、たとえば『魯迅日記』を参照することによつても充分に察知されるし、またたとえば△記『發薪』△『華蓋集統篇』の中で、この作品の背景に因んで『親領』問題の歴史、是起源頗古的、中華民國十一年（一九二二年—筆者）、就因此引起過方玄綽の牢騷、我便將這寫了一篇端午節。』と述べていることによつても傍証される。△白光△の主人公陳士成<sup>46</sup>は塾の先生をしながら科擧を目指しているが十六回目の試験にもついに落ちて半狂乱となる。かくて彼はかつて幼少の頃祖母の口から聞いた、先祖が埋めたという無数の銀塊に憑かれ、その白光の幻を追つて掘り返えすが、絶望の裡に水に落ちて死ぬ。読書人の悲惨な生涯というこのテーマは△孔乙己△からの展開であり、その心理的な描写に多少の彫りの深さはみえるが作品としての均整度は△孔乙己△に及ばぬ。なお、科擧の犠牲者の描出はおそらくはやはり彼が推賞してやまぬ『儒林外史』からのものであるろう。△免和猫△は、買ひ育てる兎の生態に家族の人々の和やかな眼差しがそそがれているが、やがて、その兎が猫に殺される顛末を散文風に綴つたもので、作品としては寧ろ『朝華夕拾』の系列に属する。その背後を流れるものは小動物達の生命に対する愛惜である。なお、そこ

にはもろもろの小動物達、たとえば、白兎、小犬、鴉、かさぎ、黒猫、鳩、鷹、蠅、やもり等々が際立つて印象的に映るが、これはおそらく当時魯迅がエロシエンコと交友し、彼の作品を翻訳出版したことに関連するであろう。△社戯△は魯迅が北京が観た芝居の印象から遠い少年の日に友達と連立つて見た社戯の雰囲気を回想的に記したもので、作品としては、やはり、『朝華夕拾』の系列に連なるが、かつて△故郷△に昇華した彼の抒情がここに至りまで持ち越されている。

次に、『年譜』には『十二月買阜成門内西三條胡同二十一號屋。』とみえる。これを『魯迅日記』に参照すれば十二月二日に西長安街の龍海軒で家屋購入の手續きを済ませたことが記録されている。なお、新購入のこの西三條胡同の家については許景宋が魯迅の言葉として次のような消息を伝えている。『至於西三條的房子，是買來安慰母親的，紹興老房子賣去了，買了八道灣的房子，她一向是住慣自己的屋子，如果忽然租房子住，她要很不舒服。這時是齊壽山和許季荊兩個人各借四百元給我的。』（欣慰的紀念）すなわち、これによれば、魯迅がこの家を購入したのは借家住いなどに慣れぬ母親に対する顧慮からであり、しかもその代金は友人齊壽山及び許壽裳からの借金であつたことが知られるわけである。<sup>47</sup>

次に、『同月、中國小說史略上卷印成。』（『年譜』）とみえる。『中國小說史略』は魯迅が北京大学或いは北京高等師範で講義した原稿をもとに成つたものであること言うまでもない。これについての論評は下巻出版の項（翌一九三三年）にゆずるが、魯迅が中国小説史を

講義して三年、ここに前人未踏ともいふべき劃期的な研究が始めて最初の実を結んだわけである。<sup>(60)</sup>

次に、『是年秋起、兼任北京大學・北京師範大學・北京女子高等師範學校及世界語專門學校講師。』(『年譜』)とみえる。前の二つは前年度からの継続であり、後の二つはこの年からの新兼任である。

この新兼任を「魯迅日記」に参照すれば、いずれも題目は中国小説史、週一回の講義であるが、その出講は、世界語專門學校は九月十七日の条に『……午後往世界語專門學校講』とみえ、女子高等師範は翌十月十三日の条に『往女子師範講』とみえる。もつとも、女子高等師範については校長許寿裳の署名による招聘状がいま魯迅生平事迹Ⅴ(北京魯迅博物館編)に再録されており、それは十二年七月付で、十二年九月から十三年六月まで国文学系小説史料兼任教員を委嘱する旨が明記されている。さて、「年譜」にはこれら四校を総括してこの年の秋から講師を兼任したように記されており、それはそれで間違とはいえないが、更に正確を期するとすれば、やはり前年度からの継続と新兼任とを区別して記すべきであろう。

なお、この年十二月二十六日に魯迅は北京女子高等師範學校文芸会において「娜拉走后怎樣」<sup>(61)</sup>と題する講演を行っている。これは「人形の家」のノラを材料にして、女性の真実の解放はその経済権の獲得をえて始めて確立されるという論旨であり、かつての「自我の節烈感」<sup>(62)</sup>へ我們怎樣做父親」<sup>(63)</sup>と並列する一種の家庭改革論である。

ついで、一九二四年(四十四歳)。まずこの年一月十七日に魯迅

は北京師範大學附属中学校において「未有天才之前」<sup>(64)</sup>という演題で講演を行った。これは、文芸界に対して天才誕生の要望があるが、それにはまず天才を培養する土——民衆が必須であること、併せて当時の胡適の提唱するいわゆる『国故整理』、或いは翻訳輕視、惡意の批評等々の問題に対する批判を内容としたものである。

次に、『五月、移居西三條胡同新屋。』(『年譜』)とみえる。これを「魯迅日記」に参照すれば、五月二十五日の条に「晨移居西三條胡同新屋。』とみえる。魯迅が弟周作人夫妻との不和から八道灣の家を出て、一時甌塔胡同に移り、ついでこの西三條胡同の家屋を購入した経過についてはすでに前述したが、「魯迅日記」六月十一日の条にその不和、確執がやや具体的なあたりで次のように記されている。『下午往八道灣宅取書及什器、比進西廂、啓孟及其妻突出罵言毆打、又以電話招重久及張鳳舉・徐耀辰來、其妻向之述我罪狀、多穢語、凡捏造未圓處、則啓孟救正之、然終取書器而出。』

この記録は魯迅が八道灣の家に書籍什器を取りに行った際に啓孟(周作人)及びとくにその妻羽太信子氏が彼に罵詈雑言をあげせかけた次第を物語っている。これをさらに補足するものとしては、魯迅がその翌日(六月十二日)語つた言葉として許寿裳が述べる次の一節があげられよう。『南屋是他的藏書室。说起他的藏書室、我還記得作人和信子抗拒一幕。這所小屋既成以後、他就獨自個回到八道灣大宅取書籍去了。據說作人和信子大起恐慌、信子急忙打電話、喚救兵、欲假借外力以抗拒；作人則用一本書遠遠地擲入、魯迅置之不理、專心檢書。一忽兒外賓來了、正欲開口說話；魯迅從容辭却、說

這是家裏的事、無煩外賓費心。到者也無話可說、只好退了。這在取回書籍的翌日、魯迅說給我聽的。我問他：「你的書全部都已取出了嗎？」他答道：「未必」。我問他我所贈的「越縵堂日記」拿出了嗎？他答道：「不、被沒收了。」（△西三条胡同住屋Ⅴ—「亡友魯迅印象記」）

この二つの引用文を併読することによつてわれわれは魯迅と周作人夫妻との不和、確執のさまをやや明らかにしうるのであるが、ここでさらに許景宋の次のような記述を併記しよう。『當天搬書時、魯迅向周作人說、你們說我有許多不是、在日本的時候、我因為你們每月只靠留學的一些費用不够開支、便回國作事來幫助你們、及以後的生活、這總算不錯了吧？但是周作人當時把手揮說（魯迅學做手勢）：「以前的事不算！」這一次、雖然「終於取書器而出」、但是不能全部拿走是可以想見的。』（△所謂兄弟Ⅴ—魯迅回憶錄）

これは魯迅と周作人との決裂の際に交わされた最後の言葉の応酬であり、以後二人は再び相寄ることなくそれぞれの途を進むことになるわけである。それはともあれ、没落過程の読書人の家庭に生育し、つぶさに労苦を分ちあつた二人の、とくに兄としての魯迅が示した、弟作人に対するいたわるような庇護、愛情は今更言うまでもないが、そのような二人の關係はここにあえなくも繼絶することになつたのである。その不和、確執の具体的な理由については、前述したように必ずしも明らかにされているわけではないが、しかし、以上の叙述から綜合的に判断すれば、おそらく、この二人の間に介在する羽太信子氏にその大半が帰せられるであろうことは略々察し

がつく。従つて、いま魯迅の言葉を借りれば、それは極めて些細な『家裏的事』に胚胎するのである。<sup>(65)</sup>ともあれ、この決裂は魯迅にとつて悲しむべき痛心事であつたことに相違はあるまい。この種のことを殆んど記さぬ日記にそれが特記されていることから彼が受けた衝激の深さが偲ばれる。

次に、『六月、中國小説史略下巻印成。』（「年譜」とみえる。前年度末の上巻の出版と合せてここにその全巻が完成したわけである。この「中國小説史略」はまさに前人未踏ともいふべき劃期的な著述たるに恥じない。その△序言Ⅴの初めに「中國之小説自來無史；有之則先見于外國人所作之中國文學史中、而後中國人所作者中亦有之、然其量皆不及全書之什一、故于小説仍不詳。……」<sup>(66)</sup>と述べているように、中国には從來小説史というべきものは皆無であり、僅かに外國人の著作に先導されているような状態であつたが、そのような中でこれをまとめあげた魯迅の苦心の並々でなかつたことが偲ばれる。この著述の直接の動機は前述のように一九二〇年北京大學から講義を委嘱されたことに由るのであるが、この方面に対する興味と研究はそれ以前からであり、少くとも一九一二年北京に移り住んだ当初から手がけた古小説、佚文の蒐集、抄写など、長年にわたる準備があつたわけである。ともあれ、多種多様にわたる歴代の小説群を精密な校勘、考証を経て分類、整理するとともにその展開の跡を明らかにしたこの工作は、たとえば、阿英が『中國人民對小説之有系統的知識、明確的觀念、可以說是從這一部書開始。』（△關於中國小説史略Ⅴ—「文芸報」一九五六年十月三十日出版）と述べているように

未開拓の分野における先駆的な成果として高く評価されなければならないまい。なお「小説舊聞鈔」「唐宋傳奇集」「古小説鈞沈」等がこの名著を支える補助的作品として成った。

次に、『同月又校懋康集・並撰校正懋康集序。』とみえる。これを『魯迅日記』に参照すれば、六月十日の条に『夜撰校懋康集序。』とあり、ここに校合及びその序文が終了したことが知られる。おもえば一九一三年に着手して以来、折にふれて続けて来たいとなみが十二年の経過を辿つてようやく完成したわけである。

ついで、『七月往西安講演・八月返京。』（『年譜』）とみえる。その正確な期日等を補足すれば、六月二十八日西北大学へ講演を約し、七月七日汽車で出発<sup>(67)</sup>、十四日西安に着き、西北大学教員宿舍に寓し二十日夏期学校開始、二十九日に全講を終了した（『魯迅日記』）。その講演のテーマは△中国小説的歴史の変遷<sup>(68)</sup>であつた。

魯迅のこの西安行は国立西北大学・陝西教育庁合併の夏期学校における講演が目的であつたこと勿論であるが、その他西安（長安）の風物に接することは彼がひそかに胸中にあたためていた楊貴妃を作品化するための便宜という含みも副次的にはあつたらしい。尤もその計画はついに未完のままに終つてしまつたのであるが。さて、魯迅は講演の余暇に同行の孫伏園らと名所を遊歴し、唐代文化の跡を探訪したが、それらの古蹟も總体的には彼にさしたる感銘も与えなかつたようである。それについては林辰が孫伏園の記録を引用して述べる次の一節が参照されよう。『大多數の古蹟・大抵都已零落破敗、或爲後人重修、並不能引起他的好感、所以當孫伏園叩問他的

意見時、他答覆說：「我不但甚麼印象也沒有得到、反而把我原有的一點印象也打破了！」（楊貴妃）他以爲：「看這種古蹟、好像看梅蘭芳扮林黛玉、姜妙香扮賈寶玉、所以本來還打算到馬嵬坡去、爲避免看後的失望起見、終於沒有去。」（遊記頁九二）』（△魯迅赴陝始末<sup>(69)</sup>）

ここに窺われる、西安古蹟に対する魯迅の印象は、本来あるがままのかたちには保存さるべきものが、『零落破敗』するままにうち捨てられ、或いはいたずらに『後人重修』が加えられていることへの失望と読みとれる。そのような魯迅の感慨は同時にまた彼が並々ならぬ熱意を傾注した金石拓本の蒐集研究及び古書の校勘輯佚等の工作にそのまま共通するものと思われる。ともあれ、この西安行についての魯迅のその種の話は彼がわずかに『今年夏天游了一回長安、一個多月之後、胡里胡塗的回来了。知道的門友便問我：「你以爲那邊怎樣？」我這才慄然地回想長安、記得看見很多的白楊、很大的石榴樹、道中喝了不少的黃河水。然而這些又有什麼可談呢？我于是說：「沒有什麼怎樣。」他于是廢然而去了。』（△說胡鬚<sup>(70)</sup>）と述べていることから推察されよう。

かくして、滞在二十二日、八月四日に西安を発ち、十二日に北京到着<sup>(71)</sup>（『魯迅日記』）、ここに西安行の全日程をとどこおりなく終了したわけである。

ついで、『十月譯成日本厨川白村著論文苦悶的象徵。』（『年譜』）とみえる。彼がこの翻訳に着手したのは九月二十二日夜であり、十月十日夜には訳了している（『魯迅日記』）ので、その間計十九日を費し

たことになる。この翻訳の△引言Ⅴには、まず前年の関東大震災に遭難死した厨川白村の略歴を述べ、ついでこの書的主旨として、それぞれ△創作論Ⅴの第四章（精神分析学）及び第六章（苦悶的象徴）から『生命力受了壓抑而生的苦悶懊惱乃是文藝の根底、而其表現法乃是廣義的象徴主義』（第四章）、しかし『所謂象徴主義者、決非單是前世紀末法蘭西詩壇の一派所曾經標榜の主義、凡有一切文藝、古往今來、是無不在這樣的意義上、用着象徴主義的表現法的。』（第六章）と引用して説明している。ついで、原著者はベルグソン及びフロイトを原理的に応用し、そこに自己の獨創力を加え、文芸に対して獨得の見解と深切な理解とを持つに至つたことを説いている。

さらに、この論文を翻訳する理由として『非有天馬行空似の大精神即無大藝術の產生。但中國現在的精神又何其萎靡鋼蔽呢？這譯文雖然拙澀、幸而實質本好、僞讀者能够堅忍地反覆過兩三回、當可以看見許多很有意義的處所罷：這是我所以冒昧開譯的原因、——自然也是太過分的奢望。』と述べている。<sup>(1)</sup> 厨川博士は一般的には、文芸と実生活の結合を念願とし、文芸を書齋から解放し、それによつて実社会を啓発し、生活の原理を確立せんとした人として評價されておりまたこの「苦悶の象徴」はそのような文芸を媒体とする一種の文明批評ともみられるが、ともあれ、魯迅はこれを翻訳、紹介することによつて中国の『萎靡鋼蔽』せる精神を振り起こし、大芸術の產生に寄与するものであり、それはまた彼の外国文学の翻訳、撰取の基本線に連なるわけである。さらに△譯「苦悶的象徴」後三日序Ⅴによれば、『因着這於我有翻譯的必要、我便於前天開手了……』

とみえ、魯迅にとつて翻訳の必要があつたというのは、やはり、前引の『生命力受壓抑而生的苦悶懊惱乃是文藝の根底……』とする文学觀から發する奔放な文明批評的態度が當時の魯迅にとつて切実と感得されたからであらう。なお、許寿裳はこの翻訳中に魯迅が語つた言葉として『這是一部有獨創力的文學論、既無於科學家似的玄虛、而且也無一般文學論者的繁碎。』（△雜誌翻譯Ⅴ——亡友魯迅印象記）と述べ、魯迅がこの原書の獨創性、明快性に共感した旨を伝えている。因みに、魯迅がこの「苦悶的象徴」を北京大学の講義の教材の一つに利用していたことは尚鉞（前出）が『……我一直這樣聽了先生三年的講授。這中間、從一部“中國小說史略”和一本“苦悶的象徴”中、我却獲得了此後求學和作人的寶貴教育。』（△懷念魯迅先生Ⅴ——憶魯迅）と述べていることから察せられる。<sup>(2)</sup>

ついで、『仍兼任北大・北師大・北女高師及世語專講師。』（△年譜Ⅴ）とみえるが、これはいづれも前年度からの継続である。<sup>(3)</sup>

ついで、『是年冬起爲語絲週刊撰文。』（△年譜）

とみえる。「語絲」の創刊はこの年十一月十七日であり、魯迅はその積極的な支持者の一人であつた。この週刊と魯迅の關係については△我和「語絲」的始終Ⅴ（△三聞集）に詳しいが、いま主としてそれに拠つて述べる。孫伏園はそれまで「晨報」副刊の編集者として活躍していたが、その頃、劉勉己<sup>(4)</sup>という、晨報館と關係の深い人が新らしくヨーロッパから歸つて來た。この人は副刊に不満を持ちこれを改革しようと計画していた。たまたま魯迅は當時流行の甘つたるい失恋詩を皮肉つて△我的失恋Ⅴ（△野草）という詩を某生者とい

う筆名で副刊に投稿した。ところが劉勉己は勝手に編集者の同意もえずにこの原稿を『不成東西』として副刊からけずつてしまい、その確執から孫伏園はついに辞職してしまつた。魯迅はそのことにあつた種の重圧感を覚えていたが、その数日後孫伏園から刊行物についての提案があり、魯迅は勿論これに協力を約し、かくて、週刊「語絲」が誕生した、というのである。この「語絲」という題名について魯迅は『聽説是有幾個人、任意取一本書、將書任意翻開、用指頭點下去、那被點到的字、便是名稱。』（『我和「語絲」的始終』）と述べているが、そのような恣意的な選択の外に、あるいは五四運動（一九一九）との関連が考えられはしないか。つまり、当時一般的には五四退潮期と呼ばれ、魯迅の表現をもつてすれば、五四運動の策源地たる北京が『倒顯着寂寞荒涼的古戰場的情景』（『中國新文學大系小説二集序』）、そのような時期である。この週刊が当時の文化界の沈滞を打破する意図をもつて創められた点を考えれば、当然そこには五四への反芻がなければならず、それが五四と類似音の語絲の選択に秘められていたとみることはできないであらうか。ともあれのち一九三〇年の休刊まで、新文化推進の一つの砦となつた「語絲」の発刊は、とくに、魯迅との関係の深さにおいて特筆されなければならない。

なお、この年彼はいま「彷徨」に収録されている『祝福』『幸福的家庭』『肥皂』『在酒樓上』等を発表（三月～五月）、また、いま「野草」に収録されている『秋夜』から『復仇其二』まで計六篇の散文詩等を書いたが（九月～十二月）、その紹介等については、

ここでは便宜上それぞれ一九二六年（『彷徨』出版）、一九二七年（『野草』出版）の項にゆずり稿を改めて述べることにする。

## （五）五卅惨案—女師大事件

ついで、一九二五年（民國十四年）。まず、この年の二月、魯迅は『青年必讀書』と題する一文を発表し、論争の端緒となつた。これは副刊に『京報副刊』の徵求とあるように「京報副刊」に応えたアンケートで、全文わずかに百八十七字の短文にすぎないが、その主旨は『我以爲要少——或者竟不看中國書、多看外國書。少看中國書、其結果不過不能作文而已。但現在的青年最要緊的是“行”、不是“言”、只要是活人、不能作文算什麼大不了的。』という表明に収約されよう。一読いささか奇異の感すら伴ない易いかにみえる、中国の書よりは外国の書を、という表明は、つまり、現在の青年にとつて最も緊要なのは“行”であり、“言”ではないからというのであるが、そのような決断の背景については、たとえば、周啓明（作人）は『但我們知道那時正是北洋政府的反動時代、社會上復古空氣很濃厚、提倡古典文學、就會被復古派所利用、有害無益、魯迅反對讀古書的主張是對於復古運動的反抗、并不足証明他的不讀古書、而且他的反對青年讀古書的緣放正由于他自己讀透了古書、了解它的害處、所以才能那麼堅決的主張。』（『魯迅說古書』）「魯迅的青年時代」と説明している。ここに指摘されている復古、反動の内容を具体的に明らかにすれば、それは、つまり、かつて五四文化革命に参加した胡適等が後に「努力週報」を創刊し（一九二二）、

その副刊「読書雑誌」上において唱導した『蹶進研究室』或いは『整理國故』等の傾向を指すわけである。要するに、魯迅のこの「青年必読書」は五四文化革命後のそのような復古、反動的な傾向をひかえ、以後直ちに迎える五卅惨案、女師大事件等革新的エネルギーが爆発する時点における発言であることに注目すべきであり、その現実をふまえて始めて魯迅の真意のほどが汲み取れるであらう。

ついで、この年の四月、魯迅は青年文学者を援助して莽原社を創立、「莽原」週刊を創刊(二十四日)した。その目的は『我早就很希望中國的青年站出來、對於中國的社會、文明、都毫無忌憚地加以批評、因此曾編印《莽原週刊》、作爲發言之地、……』(「華蓋集題記」)と述べているように、中國の青年達に社會、文明批評の場を提供し、それによつて「擯去舊社會的假面。』(「兩地書」一七)というところにあつた。「莽原」週刊ははじめ「京報副刊」の場をかりて発行され、魯迅を主編者に、章素園、章叢蕪、李霽野、臺靜農、高長虹、向培良、尚鉞らがそのメンバーであつた。魯迅はそれら若い人々を『漆黒的染缸』(「兩地書」六)を打破するにふさわしい、『不問成敗而要戰鬥的人』(同)として、社會、文明批評の興隆に期待をよせたのであつた。そのような社會、文明批評に対する渴望は前述の「苦悶の象徴」の翻訳と必ずしも無縁ではないと思われるがそれはともあれ、『這些人裏面、做小説和能翻譯的居多、而做評論的沒有幾個：這實在是一個大缺點。』(「兩地書」七)と述べているように、所期の目的といささかずれた缺点是否定すべくもなかつた。ともあれ、魯迅はこの「莽原」週刊編集のために大いに精力的に腐

心したが、やがて『到了十一月、京報要停止副刊以外的小幅了、便改爲半月刊、由未名社出版。』(「中國新文學大系小説二集序」)とみえるように、十一月(二十七日、第三十期まで)で終刊、以後は半月刊「未明」として未名社から出版した。この未名社の主なメンバーは魯迅、章素園、章叢蕪、李霽野、臺靜農、曹靖華ら六名である。未名社創立の経緯については李霽野の「記「未名社」」(「回憶魯迅先生」)に詳しいが、それは主に外國文學(とくにロシア、ソ連文學)の翻訳出版の便宜をかねて魯迅が前記の青年文学者を援助して作つた団体である。未名社のメンバーは莽原社のそれと大部分重複し、甚だ密接不離の關係にあつたが、要するに、魯迅が文字通り寸暇を惜んでこの二つに傾注した情熱は若い批評家・翻訳家の保護、育成という念願に支えられていた。

つぎに、この年の特記すべき事件としてはいわゆる五卅惨案の激発をあげなければならない。要約すればこれは日本人経営の紡績工場で労働者顧正紅が殺害されたことに端を発し上海の労働者、商人学生が五月三十日南京路で示威運動を行い、イギリス警官隊の発砲をうけ夥しい死傷者を出した事件である。この惨事は異常な反響を呼び、「上海總工會」が成立し、各層の連合戦線が結成され、直ちに上海全市にわたるゼネストにまで発展、ついで、この風潮は全国的に波及するに至つた。想えば、一九一七年の文學革命によつて捲き起された革新的風潮が一九一九年の五四運動に第一のピークを示したとすれば、この五卅惨案はまさに第二のピークと称すべきであらう。しかも、五四はおおむね学生を主体とする運動であつたが

五卅に至つてはすでに広範な労働者・商人・学生の團結闘争にまで昂まつたことがその發展的特質として注目されなければならない。

この五卅惨案に対する魯迅の反応は、たとえば「魯迅日記」六月五日の条に『爲上海事募損、損以五元。』とみえる外に「忽然想到V十及び十一（『華蓋集』）に散見する。しかし、これは事件そのものの核心をつくといつたものではなく、イギリス巡査による中国市民の射殺という事実を前に反撃もせず屈辱的な弁解を先にするその矛盾をかみしめ中国の将来を憂慮する（十）」といつた筆法であり、或いはこの事件に斃れた血の犠牲者に対して文学者の有用性を反問し『一つの事件ごとに必ず一回の狂喊があるわけのものではない』（十一）といつた、なにか苦澁をこめた鬱結的な表明にとどまつてゐるかにみえる。この種の対応は前述した五四の場合を聯想させるが、ここではさらに北京、上海という距離感と事件そのものの先行性を併せ考えなければならないであらう。

さて、次に『八月、因教育總長章士釗非法解散北京女子師範大學、先生與多數教職員有校務維持會之組織、被章士釗違法免職。』（『年譜』）とみえる。この教育總長章士釗による北京女師大の非法解散、それに対抗する学生及び魯迅らのレジスタンス及びそのための連去免職という一連の事件はいわゆる女師大事件と呼ばれるが、その経過のあらましを各文献を参照しつつ述べる。

北京女子師範大學は、はじめ清光緒三十四年（一九〇八）に女子師範科が設けられ、後民国八年に高等師範に改組され、十三年に師範大學に昇格した学校である。当時の校長許寿裳は不如意な環境の中

でその施設の整備或いは北京大学長蔡元培と密切な連絡をとり教授陣を聘任するなどその経営に苦心していたが、たまたまある職員の評職にからんで一部学生が校長の不公平を訴えるなどの裏面工作があり、許寿裳はついに校長の任を辞した。そのあとに楊蔭榆が校長に就任したが、彼女の封建反動的な傾向に反対する学生運動はおよそ前年（一九二四）の秋頃から起り、以後数カ月未解決のままであつた。ついで、この年（一九二五）一月に学生代表は教育部に対して、校長楊蔭榆の罷免を要求する上呈文を提出した。この運動に対して教育總長章士釗は「整頓學風」を声明、楊校長を擁護し学生を弾圧した。許広平はその時文科三年生で学生会総幹事であつた。ついで五月七日、国恥紀念日に学校で講演会が開催されることになつたが学生会は楊校長の出席を拒否する議決を行つた。いよいよ当日の朝楊校長は数名の講演者とともに講堂に現われた。学生側はこれに憤激、会場は混乱した。その夜、許広平と劉和珍が推されて、ある教育系の教員（兼教育部役人）のもとへ事態收拾のために赴いたが、話はまとまらず、ついで九日、評議會の名義で学生会役員六名の除籍が公示された。学生側はこれに承服せず、騒動は全体に波及した。許広平は学生会の宣言によつて校長室の封鎖を断行、かくて、彼らを中心に各級主任及び教員に対する説得が行われた。ついで、五月二十七日、除籍学生を擁護する「北京女子師範大學風潮宣言」Vが魯迅（起草者）を含めて七名の教員の署名のもとに「京報」上に発表された。この事態に應じて章士釗はついに八月六日、國務會議に女師大の停弁を提案し、即日部員を派遣して接収の挙に出た。学生

側は直ちに開会し、八月七日校務維持会<sup>(86)</sup>を組織してこれに対抗した。魯迅は勿論その会の委員の一人に選ばれた。かねて魯迅をマージクしていた章士釗はこれを口実にして教育部僉事の職を解いた。<sup>(87)</sup>なお、その間における章士釗、楊蔭榆等の反撃について補記すれば、八月十九日教育部会議において女師大を北京女子大学に改組することにし、専門教育司司長劉百昭を派遣して劃策させたが、女師大生と激突、ついで二十二日には流氓女丐の徒を雇い、学生を校外に追い出す等の挙に出た。さて、許寿裳、齊寿山（教育部視学）は章士釗による魯迅の免職を黙視しえず、<sup>(88)</sup>反対教育総長章士釗之宣言<sup>(89)</sup>を發表、ためにこの二人も免職された。

女師大非法解散後は、宗帽胡同に校舎を借り、教員学生一体となつて授業を続けること三カ月、ついに十一月に至つて章士釗、楊蔭榆は退陣の止むなきに至り、ここに女師大は復校した。王士菁はこれについて『一九二五年十一月三十日、<sup>(90)</sup>女子師範大學宣告、章士釗逃往天津、楊蔭榆撤職、女子大學取消、學生們仍回到原址（石駝馬大街——筆者）上課、女師大事件至此就取得了完全的勝利。』（魯迅）と述べている。

以上、極めて概略ながら女師大事件の経過を辿つたが、この事件は魯迅が直接その渦中にあつただけにさらに究明さるべく多くの問題を含んでいる。

はじめ、校長排斥というかたちで起つたこの問題は当時の新旧の対立、抗争の一つの頂点を示したといえる。相互に気脈を通ずる楊蔭榆校長、教育総長章士釗及び陳源（西滄）という旧い強い強固な壁に

対する女師大学生会（自治会）という新しい萌芽の対決は単なる力関係だけからみればその強弱は自ずから明白であろう。しかし、いわゆる五四退潮期を経て五卅惨案という革新の波の異常な昂まりを背景に、その対決は前述の七教授の宣言等をはさんでさらにひろく北京教育会及び広範な学生の問題にまで拡大した。その中で魯迅は終始学生擁護の場から一步も退かなかつた。これは彼のかねての所論、主張からすれば当然の帰趨ながら、ここで彼はようやく当面の対象（敵）を明確且つ具体的にとらえ、その筆（雜文）はいわゆる『一刀見血』<sup>(92)</sup>ていの精彩を放つことになつた。いま「華蓋集正統篇」に収める、章士釗（「甲寅」派）、わけても陳源（「現代評論」派）等との論戦がそれである。さらに、魯迅はこの事件を介して許広平と出会い、劉和珍を識つた。前者は彼の終生の夫人となり、後者は翌一九二六年の「三一八」事件の犠牲となり、彼の北京脱出の機縁となつた人である。かくして、魯迅の人生路線にとつてこの女師大事件はまさに劃期的な事件であつたと言わなければならないであらう。

ここで、魯迅との出会いについて許広平が述べる次の一節を附記しよう。『我們都感覺到一個個學期的過去，使得就學的時間逐漸減少，而直面临着人生的開始卻瞬即來臨，在感到學識的空虛，和處世應對事物的渺茫無所指引之際，談起來就想從此比較欽仰的教師中尋求些課外的導師，因此在快畢業的前一年，即一九二九年三月，<sup>(93)</sup>就首先動手寫第一封通信（見「阿地書」）。我們決意去當面請教一下，在四月的某一天，往謁先生。』（魯迅先生与女師大事件V「欣慰的紀念」）。こ

れ以後、二人の間に書簡の応酬が徐々に頻繁に行われるのであるがそれらの殆んどはいま「雨地書」に収録されており、就いてみることができる。

なお、魯迅がこの事件の渦中に教育部僉事の職を解かれたことはすでに前述したが、彼は同月（三十一日）平政院<sup>(註)</sup>に提訴し、ついで勝訴、復職（一九二六年一月十七日）した。これに関して許寿裳は『魯迅對於章士釗、也視若無物、後來之所以在平政院提起訴訟、還是受了朋友們的慫恿而方做的、結果是得到勝訟。』（『女師大風潮』「亡友魯迅印象記」）と述べている。ここで些かの推測が許されるとすれば、この免職に対して自ずから進んで提訴する意志は魯迅にはなかつたのではないかと思われる。『……還是受了朋友們的慫恿方做的、』という文脈からしてそう読み取れるのであるが、教育総長章士釗の下でその部員であることを屑しとしない彼の心情が察せられる。とすれば、後述するようにこの年の九月以降、北大、女師大以外に新らしく中国大学、黎明中学、大中公学等への出講が目立っていることなど、或いはその傍証ではないかと思われる。

ついで、『十一月雜感第一集熱風印成。』（『年譜』）とみえる。「熱風」は一九一八年から二四年までのいわゆる雜感<sup>(註)</sup>を収録した最初の集である。「熱風」収むるところは△隨感錄Ⅴ以下計二十八篇、その全体的な傾向としては当時の「新青年」の口号でもあつた反封建、反礼教的な論旨につらぬかれてみるとみて差支えない。これをやや具体的にいえば、封建の圧力のもとに民衆を不幸におとし入れている素因、たとえば邪教的迷信、儒教的倫理あるいは国粹等々の

持つ不合理性とそれに由来する暗黒を消す一点の灯としての進化と科学の称揚とみることができよう。

次に、『十二月譯成日本厨川白村著出了象牙之塔。』（『年譜』）とみえる。これは前年度の「苦悶的象徵」につづく訳業であるが、その△後記Ⅴによれば、それまで数種の期刊に訳載したものを集め、それに新訳を加えて一冊（△文学者と政治家Ⅴを除く全訳）にしたものである。魯迅の厨川白村氏への注目については些か前にも触れたが、この「象牙の塔を出て」が魯迅に与えた感銘は、白村氏が『本國的微温、中道、妥協、虚假、小氣、自大、保守等世態。』（△後記Ⅴ）に対して『辛辣的攻撃和無所假借的批評』（同）を加えたことにあつたようである。しかも、そのような『世態』は「簡直可以疑心是說着中國。』（同）と述べているのであるが、要するに、国民性の改造という魯迅のかねての念願を果すための一つの鑑として扱んだわけであり、また、それはこの翻訳を手がけた目的として『我譯這書、也並非想揭鄰人的缺失、來聊博國人的快意。……我就是想藉此先將那腫痛提醒、而後將這、「痛快」分給同病的人民。……著者既以爲這是重病、診斷之後、開出一點藥方來了、則在同病的中國、正可借以供少年少女們的參考或服用、也如金雞納霜既能醫日本人的瘧疾、即也能醫治中國人的一般。』（同）と述べているところからも明白であらう。

なお、『年譜』に『十二月譯成……』とあるが、これを「魯迅日記」に参照すれば二月十八日の条に『譯△出了象牙之塔Ⅴ訖』とみえるので、訳了は二月（十八日）とすべきである<sup>(註)</sup>。

次に、『是年仍爲語絲撰文並編輯國民新報副刊及莽原雜誌。』（「年譜」とみえる。「語絲」及び「莽原」についてはそれぞれ前述したが、なお、「國民新報副刊」については李霽野が、これは当時魯迅がある人と交替編集にあたつたもので、魯迅が多忙な時間を割いてこの編集まで引き受けたのは、要するに、新しい力を培養する目的からであつた旨を述べている一節（「國民新報副刊及其他」）「回憶魯迅先生」が参照されよう。

次に、『是年秋起兼任北京大學・北京女子師範大學・中國大學講師・黎明中學教員。』（「年譜」とみえる。北京大學、北京女師大は前年度からの継続であるが、ここもやはり中国大學以下の新兼任とそれぞれ区別して記した方がより明確である。なお、「魯迅日記」を参照すれば、中国大學、黎明中學及び「年譜」には欠けているが大中公学の講師兼任は<sup>(10)</sup>いづれもこの年九月以降のことに属するが、それは同時に彼の食事免職、平政院提訴以後のことでもあり、従つてこれら各学校への出講は前にも些か触れたように、おそらくは以後の生活を顧慮したあらわれではないかと思われるが、これはあくまで推測の域を出ず、ここではしばらく指摘にとどめるほかはない。

なお、この年彼はいま「彷徨」に収録されている△長明燈▽△示衆▽△高老夫子▽△孤独者▽△傷逝▽△弟兄▽△離婚▽等を書き（三月～十一月）、また、いま「野草」に収録されている△希望▽から△臘葉▽まで計十五篇の散文詩を書いたが（一月～十二月）、その紹介等についてはここでは便宜上それぞれ一九二六年（「彷徨」

出版）、一九二七年（「野草」出版）の項にゆずり、稿を改めて述べることにする。

## （六） 結 語

以上、△狂人日記▽發表（一九一八）から女師大事件（一九二五）までの八年間における魯迅の歩みをおおよそ年代順に従つて述べた。

まず、その社会背景をみれば、一九一七年の文学革命によつて触発された革新的エネルギーが、それぞれ北京、上海を舞台に五四運動—五卅惨案となつて激発、また、文学の面においては、中国最初の文学結社ともいふべき文学研究会、創造社が同じく北京、上海を根拠地として相互に対立、反撥するという、いわば疾風怒濤の時期であつた。その間、特筆すべきは、彼が中国最初の近代小説と目される△狂人日記▽をもつて作家—魯迅として登場、以後快調なペースで執筆をつづけ、ついに代表作△阿Q正傳▽に至つて輝やかしい金字塔を打ち建てたことである。いま「呐喊」「彷徨」に収録するこれらの創作、「熱風」「華蓋集」に収録する雜文、あるいは魯迅文学の原型といわれる散文詩「野草」の大部分、さらに、それが自己及び中国にとつて切実であるという選択基準に裏打ちされた数々の翻訳……と数えあげれば、彼がこの時期に手がけた作品群はいかにも多彩、豊富である。それらは勿論、そのジャンルに応じてそれぞれに持ち味は異なるけれども、極めて大まかに概観するとすれば、やはり、その出発拠点となつた「新青年」への共感が尾を引いており、旧い封建的なものへの挑戦と新しい将来への期待、その矛盾撞

着の表白が根底を支えているとみられよう。それは同時に、彼が後（一九三四年）に△国際文学社の問いに答えて『「先前、旧社會的腐敗、我是覺到了的、我希望着新的社會的起來、但不知道這“新的”該是什麼、而且也不知道“新的”起來以後、是否一定就好。』（△且介亭雜文）』と回想した、そのような一種の混沌にも相關するであろう。

さて、それらの作品以外に特記すべきは、「中国小説史略」という學術的勞作が完成したことである。この劃期的な名著は直接的には彼が北京大学等の講壇に立つたところから生まれたのであるが、その講義を通して若い学生に接触、その魂にふれたことも彼の人生路線に重要な意味を持つた。中国の暗い未來像を消すために若い力に寄せる彼の期待と信頼は、「語絲」、わけても「莽原」、未名社等に対するじつに精力的なあるいは没我的ともみえる献身にまでつながる。同時にそれは、かつての日本留學時代に『未產生』のままに終つた「新生」<sup>(10)</sup>への見果てぬ夢の再現ともうけとれるであろう。さらに、この時期の魯迅にとつて最大の痛心事の一つは、弟、（周）作人との決裂であろう。おそらくそれは極めて些細な家庭的紛糾に由来すると思われるが、この決裂は、しかし、そのまま魯迅の死（一九三六）にまで持ち越される文字通りの断絶となつた。

ついで、上海に勃発した五卅惨案に至つては、むしろ事件そのものが先行した感があるが、この事件をはさんで起つた女師大事件は彼自身がその渦中にあつただけに意味が深い。彼は終始學生擁護の側に立つて闘つたが、ここで彼は当面の敵、反動勢力の実体を明確

かつ具體的にとらえた。その焦点はいうまでもなく「現代評論」に拋る、いわゆる『正人君子』（偽善者）であるが、かくて郁達夫が『一刀見血』と評し、瞿秋白が『戰鬪的 feuilleton』（△魯迅雜感選集序言）と呼んだ雜文は新旧対立の尖鋭化につれていよいよその真面目を發揮することになつた。この女師大事件を機縁とする許広平との出会いはまた彼女が魯迅の生涯の夫人となつた人であるだけに單なる偶然とのみはいきれぬ、なにか人生の機微の一端にふれる運命的な出会いの感が深い。

かくして、この八年間の起伏を概括するとなれば、かつて別稿に述べた沈潜からようやく起ち上り、彼自身の表現によれば『一発而不可收』（△呐喊「序」）という、いわば鬱積したものが一時に堰を切つて流れ出すような勢いで多彩な筆陣を張つた時期であり、従つて、それまでの沈潜期と対応してこれを活躍期とみて差支えないであろう。

なお、ここでは女師大事件をもつて一応の結びとしたが、それはもつぱら便宜上のためであつて、魯迅がとらえた反動勢力との闘いはその後ひきつづき、むしろ一段と苛烈さを加えて行く。それは、たとえば許広平が『可以說：女師大事件は“三一八”運動的一個序幕』（△女師大風潮序「三一八惨案」——魯迅回憶錄）と述べているように、女師大事件は翌一九二六年三月、劉和珍（前出—女師大事件）の惨死を含むいわゆる「三一八」につらなり、ひいては魯迅の北京脱出、厦門・広東行へと展開して行くのであるが、それについてはいずれ稿を改めて述べることにする。

註

(1) 魯迅という筆名の由来について許寿裳は魯迅自身が語つた言葉として次のように説明している。(一)母親姓魯、(二)周魯は同姓之國、(三)取愚魯而迅速之意。(△筆名魯迅)「亡友魯迅印象記」なお、魯迅は代表的な筆名で、その他の筆名も多いが、「魯迅全集」(復社版)に集録のもの七十八、△魯迅先生筆名補遺▽「魯迅全集補遺」上海出版公司)に集録のもの九、△魯迅先生筆名補遺▽「魯迅全集補遺統篇」上海出版公司)に集録のもの十五、合計百二を数える。

(2) 「魯迅伝覚書」(北大文学部紀要)9) 参照。

(3) この狂人の直接なモデルについて、周遐寿(作人)は魯迅の従兄弟の劉四である旨を述べている(△狂人は誰)「魯迅小説裏の人物」。なお、「魯迅日記」(第五冊、一九二六年十月三十、三十一日)によれば、劉四の実名は阮久孫である。

(4) この礼教は、矛盾の指摘するように『中国封建制度的思想体系』(魯迅——從革命民主主義到共產主義)「魯迅先生逝世二十周年紀念大会上報告和講話」・文芸報・一九五六年第二十号附冊)であるが、その具象的な焦点としてはいわゆる孔子教があげられる。この数千年來の伝統的な權威に対する批判を参考までにあげると、すでに一九二二年、教育總長の任にあつた蔡元培は尊孔は信仰の自由に反する旨を主張し、これに反対した。その後、袁世凱による尊孔政策の強行に対して陳独秀は「新青年」誌上に△憲法与孔教▽(一九一六年十一月一日)△孔子之道与現代生活▽(一九一六・一二・一一)△再論孔教問題▽(一九一七・一一・一一)△復辟与尊孔▽(一九一七・八・一一)等を發表して、これを排撃した。

(5) ここは些さか晦渋な表現であり、『……也不如尼采的超人的渺茫。』は一般には『ニーチの超人の渺茫には及ばなかつた。』(例えば「魯迅選集」岩波版)と訳されている。魯迅の真意は、しかし、逆説的であるように思われる。なお、△隨感錄四十一▽にも『尼采式的超人、雖然太寬渺茫、但……』とあり、これは『ニーチエふうの超人は、あまりに人間ばなれがしているようだが、しかし……』(同)と訳されている。この訳が最も妥当か否かは別として、また△隨感錄四十一▽が全体としては超人への信頼であると読みと

れるが、ともあれ、超人の渺茫というのは超現實的なニューアンスをもつ表現であり、それに及ばぬというのは、より直截的、現實的であることの逆説と解されないであらうか。因みに、たとえば、王瑤は、魯迅はニーチエの超人學説には從來批判的であつたとし(この種の論法はおそらく馮雪峯以來の主潮であり、これについてはなお問題がある一筆者)、△隨感錄四十一▽等を援用してその意に解しており(△魯迅對於中国文学遺產的態度和他所受中国文学的影響)「魯迅与中国文学」、また、劉泮溪等著「魯迅研究」にみえる『……他的狂人日記、雖受到外国作家的影響、但却、比果才理的憂憤深広、也不如尼采的超人的渺茫。』(△魯迅小説的特色・五今天研究魯迅小説的新意義)も、その意に解される。しばらく指摘にとどめる。

(6) 「魯迅伝覚書」(北大文学部紀要)9) 参照。

(7) 許欽文は、魯迅が後に上海で専ら印税で生活を維持するようになった時『以前写小説、哪里想到借此吃飯的!』と語つた想い出を述べ、また、「呐喊」の印税もはじめは北新書局(当初の資本五百元)に次の書の出版費にあてさせていた事情を明かしている。(△魯迅先生在磚塔胡同)「學習魯迅先生」参照。

(8) △我之節烈觀▽は、中国伝統の「節烈」が現在ではすでに存在価値のないものであり、女子解放、男女平等のためにもこの無意味なものを除去すべきであり、人類すべてが正当な幸福を享けるようにしよう、という論旨である。

(9) △隨感錄▽(二五)は「新青年」(五卷三号)に掲載。放任されたままの中国の子供達に対する「人」の父としての注意を喚起したもの。筆名は唐俟、但し、本文末尾には(適)とみえる。△同▽(三十三)は五卷四号に掲載。迷信と科学の対決を述べたもの。筆名は唐俟。△同▽(三五・三六・三七・三八)は五卷五号に掲載、(三五)はいわゆる国粹保存に対する批判。

(三六)は国粹と世界人の調和について。以上筆名は唐俟。(三七)は筆法に対する批判。(三八)は自負にまつわる思想上の病いをなおすための科学の提唱である。以上筆名は魯迅。

(10) エスペラント問題についての銭玄同との通信である。

(11) 朱自清編「中国新文学大系・詩集」に△夢▽△愛之神▽(集外集)及

び△他V(「新詩年選」)の三首が収録されているが、その△導言Vには魯迅の詩についての言及はなく、わずかに△詩話Vの条に『集外集有詩、但很少。』と述べているだけである。

(12) 竹内好△年譜V(「魯迅」世界評論社版)一九一九年の項参照。

(13) 「魯迅伝覚書」(「北大文学部紀要」6)参照。

(14) 「魯迅伝覚書」(「北大文学部紀要」9)参照。

(15) 「年譜」には朱安女士についてふれていないが、この時一緒に上京した。なお、周遐寿はこの時同行したのは魯迅を含めて七人であり、その中の子供二人は三弟(建人)夫妻の子である旨を明かしているが(△路程V「魯迅小説裏の人物」、母親、魯迅、周建人夫妻と子供、計六人以外の二人は朱安ということになる)。

(16) 周遐寿は、この間土のモデルは章運水であり、彼の父章福慶は特定の季節に周家に來て働いていた労務者であると明かしている(△阿個故郷V「魯迅小説裏の人物」)。

(17) 彼女のモデルについては周遐寿△豆腐西施V(「魯迅小説裏の人物」)参照。

(18) この紹介は、周作人△説武者小路君所作一個青年的夢V(「新青年」四卷五号)である。

(19) △一個青年的夢訳者序V(唐棣編「魯迅全集補遺統編」)によれば、八月一日の午后、孫伏園との話合いがあり、その晩に翻訳に着手したとみえるが、「魯迅日記」八月二日の条に『……開訳或ル青年ノ夢』とみえる。

(20) なお、これは「新青年」(七卷三号)にも掲載されている。

(21) 魯迅が訳した鵲外の△沈黙の塔V(「現代日本小説集」一九二三年出版)に、いわゆる「危険なる洋書」を列挙した中に「Aeliaschew は個人主義の元祖 Stinner を崇拜して、革命家を主人公にした小説を多く出す。云々……」とみえる。或いは、魯迅とアルツイバーシエフの出会いに關連があるかも知れない。

(22) △明天V本文末の日付一九二〇年六月と掲載誌「新潮」(二卷一号)の発行日(一九一九年十月)の矛盾については、当時の定期刊行物の實際の出版はその日付よりも遅れるのが常であった旨の説明がある(「魯迅全集」・人

民文学出版社版・第一巻注釈参照)。

(23) この小説は最初一九二〇年七月の北京「晨报」に発表されたいが、その号がないので確定しない旨の説明がある(「魯迅全集」・人民文学出版社版・第一巻注釈参照)。なお、周遐寿も同様に『大概是給晨报副刊所写的。』(△一件小事V「魯迅小説裏の人物」)と述べている。

(24) たとえば、小説△端午節V△社戯V△在酒樓上V、翻訳△工人綏惠略夫V△愛字的創V△紅的花V及び△近代捷克文学概観V△小俄羅斯文学略説V等すべて「小説月報」に発表した(林辰△魯迅与文芸会社V「魯迅事蹟攷」参照)。

(25) たとえば、翻訳△工人綏惠略夫V△一個青年的夢V等この叢書に含まれる。

(26) たとえば、魯迅を文学研究会員であるとする小田獄夫氏の誤り(「魯迅伝」筑摩書房版)もそのようなところに起因するのであろう。

(27) 一九四五年夏、林辰は重慶で茅盾に会い、魯迅は文学研究会員であったか否かを確かめ、会員ではなかったという返答を得ている(△魯迅与文芸会社V「魯迅事蹟攷」参照)。

(28) 「魯迅伝覚書」(「北大文学部紀要」9)参照。

(29) △阿Q正伝Vは一九二一年十二月四日から一九二二年二月十二日まで、毎週或いは隔週に「晨报副刊」に連載された。

(30) 巴人というのは「下里巴人」から取ったもので、決して高尚ではないという意味である旨△阿Q正伝的成因V(「革蓋集統編の統編」)に説明してある。「下里巴人」は宋玉の△对楚王問V(「文選」)にみえる言葉で、下等な歌曲をいう。この巴人という筆名を△阿Q正伝Vにだけ用いたのは、周遐寿のいうように「新青年」の小説作者(魯迅)と区別しようとしたためである(△阿Q正伝V「魯迅小説裏の人物」)とともにやはり「開心話」という欄名にひきずられたからであらう。

(31) この第一章序に、いわゆる歴史癖・考據癖ありと自称する学者(胡適)に対する諷刺がこめられていることはすでに明らかである。

(32) 高一涵(1885~?)安徽省の人。日本明治大学政治科卒。帰国後、北京大学、武昌大学等の教授をつとめた。著者に「欧洲政治思想史」「政治学

綱要」等があり、また、「新青年」「每週評論」「努力週刊」等の編集に任じた。彼の以下の引用文は魯迅△阿Q正伝の成因△に拠つて引く。

(33) 中国における小説のそのような読まれ方は、かつて「紅樓夢」のモデル問題に終始した「紅学」等があるが、魯迅の小説の場合に至つても他に△孔乙己△がある(△孔乙己△文末附記△「魯迅全集補遺続編」参照)。

(34) 「魯迅伝覚書」(「北大文学部紀要」6) 参照。

(35) 以上二つの翻訳は、それぞれ訳者記を附して、唐毅「魯迅全集補遺」(上海出版公司版)に収録されている。

(36) 実際には翌一九二二年「創造季刊」の発刊をもつて成立とすべきであろうが、郭沫若が『這個會議或者可以說是創造社正式成立、時候は一九二一年七月初旬、日期是那一天我不記得了。』(「創造十年」と述べているので、いまそれに従う。

(37) この予告は創造社同人の郁達夫が書いた(「創造十年」参照)。

(38) 郭沫若は『……特別是屬於文学研究会的我們的魯迅先生……』(「創造十年」とい、魯迅先生到底不愧是文学研究会的發起員之一人、)(同)と述べているが、いずれにしても魯迅と文学研究会の不離不即の關係が察せられる。

(39) 「魯迅伝覚書」(「北大文学部紀要」9) 註34参照。

(40) 「愛羅先珂童話集」は、文学研究会叢書本(一九二二年初版・商務)は冒頭に△序△「我的学生生活の一断片——自叙伝——」があり、作品は魯迅訳以外に觀泉、愈之訳それぞれ一篇を加えて計十一篇、「魯迅全集」(復社版)は魯迅訳十三篇の外に△序△及び附録として△憶愛羅先珂華希理君△(江口渙原作)があり、「魯迅訳文集」(人民文学社版)は△序△及び魯迅訳十三篇である。なお、「桃色の雲」は翌一九二三年七月、新潮社から「文芸叢書」の一つとして出版された。

(41) 主として高杉一郎著「盲目詩人エロシエノコ」(新潮社・昭和三十一年刊)及び「エロシエノコ全集」(みすず書房・昭和三十四年刊)など。

(42) 許欽文は「詩人は一九一四年由「俄国世界語者協會」派遣到日本和美国進行宣傳工作的、因為第一次世界大戰發生、他断絶了旅費的接濟、這才只好逗留在日本。」(憶△五四△話愛羅先珂△「學習魯迅先生」)と述べてい

る。

(43) 中根弘氏が一九二二年十月九日の読売新聞に書いたものを魯迅は「盲目詩人最近の踪跡」という題名で翻訳しているが、その△訳者識△によれば、エロシエノコは本国に入ろうとして拒否され、引き返えしてハルビンに住みついで天津を経て上海へ渡つた、とみえる。

(44) この序文及び訳後附記はすべて「魯迅訳文集」2(人民文学社版)に収録されている。

(45) 許欽文は「他于北京大学教世界語講俄羅斯文学以外、還在北京辦了個世界語專門學校。」(△憶△五四△話愛羅先珂△「學習魯迅先生」)と述べている。

(46) 「魯迅伝覚書」(「北大文学部紀要」6) 参照。

(47) なお、「欣慰的紀念」のこの条は、魯迅の筆名の一つである宴之敖の意味について述べているが、宴は「(家)と日と女、敖は出と放(「説文」では敷、つまり、日本の女に家から追い出された意味であるという。

(48) 「呐喊」ははじめ(一九二三年八月)新潮社から「文芸叢書」の一つとして出版された時は十五篇、のち(一九二六年十月)北新書局「烏合叢書」の一つとして出版されたが、ついで(一九三〇年一月)十三版の際に△不周山△(いま、△補天△と改題し、「故事新編」に収む)をはぶいて十四篇にした。

(49) この孔乙己のモデルは通称孟夫子という落魄子弟であることを周遐寿は明かしている(△孔乙己△「魯迅小説裏的人物」参照)。

(50) この若い革命家夏瑜のモデルは清末の秋瑾女士である。彼女については「魯迅伝覚書」(「北大文学部紀要」6)に述べたが、なお、「魯迅全集」1(人民文学社版)の注釈、或いは周遐寿△秋瑾△(「魯迅的故家」及び「魯迅小説裏的人物」)にそれぞれ略記がある。

(51) 孫伏園はかつて魯迅との話題の中に、△棄△に類似する作品として、△アンドレーフの『齒痛』(原名 Ben Tobit)が出たことを伝えている。これは、キリストがゴルゴダで磔にされるその日、附近の商人△般妥別志△はたまたま齒痛に悩まされるが、彼にとつてはキリストの磔は「這樣小事」であるにすぎず、齒痛の方が重大であつた、というストーリーである。なお、孫

伏園はついで、ツルゲーネフの散文詩「工人和白手の人」(「労働者と白い手の人」)をあげている。これは労働者のために闘い、捕えられた白い手の人(拷問のため手から血色が消えた)が刑場に曳かれて絞殺されるが、ある労働者がそのあとをつけて絞殺用の縄を求め、絞殺用の縄は病気を治すという迷信がある、というストオリである(「魯迅先生の小説一談」(「葉」)Ⅴ「宇宙風」第三十期・廿五年十二月一日・参照)。

(52) 魯迅は、 $\Delta$ 葉Ⅴの中で若い革命家の墓に花の輪を置いたのと同じ意味でこの作品の中でも『不叙單四嫂子竟沒有做到看見兒子的夢。』(「呐喊」序)と述べている。

(53) 魯迅が『我的確時解剖別人、然而更多的是更無情面的解剖我自己。』(「 $\Delta$ 中国新文学大系小説二集序Ⅴ」且介亭雜文二集)と述べる、その一つの現われがこの作品であろう。

(54) この $\Delta$ 風波Ⅴの時代背景について竹内好氏は『哀世凱の帝政を織りこんだらしいが』(「魯迅」・世界評論社版)と述べ、ついで、『事件の背景は一九一七年の張勳の復辟であるが、辛亥革命当時の体験の記憶にもとづいて架空されている。』(「統魯迅作品集」・筑摩書房版)と述べている。なお、周遐寿も皇帝坐竜及び張大帥保駕など宣統の復辟を指しており、この故事の年代が民国六年七月であることには毫も問題はない。但し、これは小説であり、この復辟事件を背景に借りているまでであつて史実とは必ずしも合致しない旨を述べている(「 $\Delta$ 復辟時代Ⅴ」魯迅小説裏的人物)。

(55)  $\Delta$ 故郷Ⅴは最初「新青年」(九卷一号・一九二二年五月)に発表された。

(56) 陳士成モデルは周子京であり、魯迅の曾祖蒼年公の弟の子である旨を周遐寿は明かしている(「 $\Delta$ 県考Ⅴ」魯迅小説裏的人物)。

(57) この社戯の意味については、喬峯が、昔の制度では郷村は社に分れ、この社には通例廟があり、それを社廟という。これはもつぱら敬神の場というわけではなく、貯蔵庫の用も兼ねていた。この社廟で毎年定期に行われる芝居を社戯という。魯迅の $\Delta$ 社戯Ⅴはこの社廟 $\Delta$ 芝居を見に行つた時の情形である(「 $\Delta$ 魯迅の幼年時代Ⅴ」略講關於魯迅の事情)と述べる説明が参照される。

(58) 「欣慰的紀念」にみえるこの借金についてはそれぞれ「魯迅日記」十二

月一日の記録と対照される。なお、この阜城門内西三条胡同の家は現在魯迅紀念館の一つであり、当時の器具以外に蔵書の全部が収められ、政府の手で『魯迅故居』として保管されている。詳しくは唐張 $\Delta$ 魯迅和魯迅紀念館Ⅴ(「向魯迅學習」)参照。

(59) その出版は新潮社であるが、原稿から印成までの経過は「魯迅日記」によれば十月八日『……以中国小説史略稿上卷寄孫伏園託其付印』、十二月一日『……伏園來示小説史印成草本』、十一日『……孫伏園寄來小説史略印本二百冊』とみえる。

(60) 北京高等師範学校は一九二二年師範大学に昇格した(「中国教育辭典」・中華書局版)。

(61) この学校については前註(45)参照。

(62) 「魯迅日記」十二月十一日の条に「小説史略」をそれぞれ女高師及び世界語校に託したとみえる。

(63) この人は周作人の妻羽太信子氏の兄弟であろう。「魯迅日記」にその名がしばしばみえる。

(64) 魯迅が周作人夫妻への経済的な援助等に迫られて帰国したことは、かつて別稿において述べた(「魯迅伝覚書」――「北大文学部紀要」9)。また、この『……及以後的生活』に該当する例としては、たとえば、許景宋が『周作人回国以後・魯迅除了負担全家生活的絕大部分費用之外、連周作人老婆的全家、都要魯迅接濟。從日記上看到、魯迅在每月發薪以後、就按月向東京羽太家寄款。』(「 $\Delta$ 所謂兄弟Ⅴ」魯迅回憶錄)と述べる一節が参照される。

(65) 筆者がかつて故内山完造氏に問ひ質したところによれば、周建人の妻に羽太信子氏の妹を迎えることになつたのを、魯迅が政略結婚というようなこととて反対したが、その辺に不和の原因があつたらしい、とのことであつた。なお、昭和三十七年六月七日の朝日新聞に鮑耀明という香港在住の作家が、周夫人の死(羽太信子氏・四月八日歿)に寄せて $\Delta$ 周作人・羽太信子・胡適Ⅴと題する一文を載せているが、その中で許広平が「魯迅回憶錄」で羽太氏を非難したことによれ、『……彼女が私(周作人―筆者)に対し、不満を抱くようになったのは、恐らく怒をうつしたのであろう。信子は魯迅前夫人(朱安女史)に同情したため、不敬の辞を弄したのは事実かも知れぬが、信

子自身もまた旧家庭の出身である点から考えて、かかる態度を示したのも、また止むなしといえよう。……』という、周作人が鮑氏にあてた書信の一節を引用している。以上参考までにあげておく。

(66) 中国では一九一七年の文学革命まで小説は文学として正当な評価をうけていなかった。なお、魯迅はこの「序言」の執筆の際に少くとも塩谷温氏の「支那文学概論講話」を念頭においていたと思われる。因みに、一九二六年陳源(西滢)は「晨报副刊」に「致志摩」という公開書簡を発表、その中で「中国小説史略」は前記「講話」の小説の項に依拠したものと言いい、またそれ以前にも「閑話」の中で「史略」は全くの剽窃であるとあてこすつてゐる(李霽野「回憶魯迅」に拠る)。「史略」が「講話」の小説の項を参考にしてゐることは明らかであるが、史料の考訂その他において「講話」はその比ではなく、従つて剽窃などというのは全く当らない。なお、許広平も陳源に対してこの点を痛烈に反駁している(「魯迅的講演と講義」——「魯迅回憶録」参照)。

(67) この西安行の同行者は、孫伏園・王桐齡・李濟之・夏元璽・胡小石・蔣廷黻……であつた。詳しくは、林辰「魯迅赴陝始末」(「魯迅事蹟攷」)参照。なお、以下の記述は同書に負うところが多い。

(68) この講演の原稿は中国小説の歴史の変遷は「魯迅全集」8(人民文学出版社)に附録として収められている。これについては、その補訂を中心とする小論をかつて「東京支那学報」(第六号)に発表した。

(69) この楊貴妃を主題とする魯迅の腹案が戯曲であるか或いは(長篇)小説であるかについては明確でない。許寿裳は『有人説魯迅沒有做長篇小説是件憾事、其末他是有三篇腹稿、其中一篇曰「楊貴妃」……』(「雜談著作」——「亡友魯迅印象記」といい、王瑤は『掘許壽裳「亡友魯迅印象記」第十五節及馮雪峯「過來的時代」中「魯迅先生計畫而未完成的著作」記載「楊貴妃」為長篇小説、但孫伏園「魯迅先生三事」「楊貴妃」中一節、說是三幕劇本。未知就是。』(「魯迅對於中國文學遺產的態度和他所受中國文學的影響」註十三)「魯迅と中國文學」と述べてゐる。孫伏園が同行者であり、また楊貴妃について魯迅と話している(林辰「魯迅赴陝始末」)ところから戯曲であるように思われるが、しばらく疑問にとどめる外はない。

(70) 林辰は魯迅の帰京を『七月尾』としているが(「魯迅赴陝始末」参照)、こゝは、やはり「年譜」の八月が正しい。

(71) 因みに、「魯迅研究」(劉泮溪等著・作家出版社)によれば、この「苦悶の象徴」は資産階級文芸理論体系に属するもので、魯迅は当時厨川白村の思想が中国の進歩文芸思想の發展に役立つと誤認したのであるが、マルクス主義世界觀を掌握するや白村のこの種の文芸思想を断然拋棄した(詳しくは同書「魯迅對日本文學的翻譯」参照)と述べてゐる。最近の中国における魯迅研究の普遍的な見解の一つとして参照されよう。

(72) いま「魯迅全集補遺統編」に収録。一九二四年十月一日「晨报副刊」に掲載されたものであるが、魯迅がこれを書いた九月二十六日の日付と訳後三日という表題には実際には一日のずれがある。

(73) 魯迅が「苦悶の象徴」を教材に利用していたことについては、許欽文も『魯迅先生在北京大學講完了「中國小説史略」、就拿「苦悶的象徴」来做講義……』(「魯迅先生評」(「苦悶的象徴」——「學習魯迅先生」)と述べてゐる。おそらく、これは北京女高師においても同じであり、たとえば、「史略」第十四篇「元明以来之講義」を講義する際に、文芸(小説)を檻にたとえての魯迅の説明(詳しくは許広平「魯迅的講演と講義」——「魯迅回憶録」参照)が「苦悶の象徴」第三「文芸の根本問題に關する考察」中の「白日の夢」にみえる、鉄柵にたとえての叙述と同一であることなど、その傍証とみられよう。

(74) この四校における魯迅の出講表を参考までにあげると、北京大学——金曜午後一回、北京師範大學——金曜午前一回、北京女高師——月曜午後一回、世界語專——火曜午後一回である(「魯迅日記」)。

(75) この人の名を、魯迅は不幸にして忘れたといつてゐるが、いま林辰「魯迅と文芸會社」(「魯迅事蹟攷」)によつて補う。

(76) 魯迅は「語絲」の積極的な支持者、投稿者であつたばかりでなく、のち上海で復刊後およそ半年(一九二八年上半年)はその主編者であつた。

(77) 「魯迅全集」3(人民文学社)収録の「青年必読書」の注釈1及び「通訊」の注釈13参照。また、李霽野もそれに就いて述べてゐる(「在北京時的魯迅先生」——「回憶魯迅先生」)。

(78) 高長虹は山西省孟県の人。魯迅は莽原社のメンバーの中で彼を『奔走最力者爲高長虹。』(『中国新文学大系小説二集序』)とほめ、また、李燾野は魯迅が『昨夜校長虹の稿子、吐了血。』(『魯迅先生和青年』)「回憶魯迅先生」と語った想い出を記しているが、のち、魯迅とわかれ、一九二六年上海に狂飢社を組織し、魯迅と対立した。なお、以下の向培良、尚鉞もそれに参調したが、それらについては林辰『魯迅与狂飢社』(『魯迅事蹟攷』)に詳しい。

(79) 許寿裳『女師大風潮』(『亡友魯迅印象記』)、許広平『魯迅先生与女師大事件』(『欣慰的紀念』)及び『女師大風潮』三二八、慘案(『魯迅回憶錄』)、魯迅『華蓋集正統篇』収録の關係雜文、『阿地書』及びその注釈(『魯迅全集』・人民文学出版社)など。

(80) 『中国教育辞典』(中華書局版)に拠る。

(81) 楊蔭榆は江蘇省無錫の人。アメリカコロンビア大学留学。一九二四年北京女子師範大学長に任ず。いわゆる女師大事件を惹き起こし、教育総長章士釗(『甲寅』主編者)及び陳源(『現代評論』主編者)と氣脈を通じ、学生及びこれを擁護する魯迅らと紛糾をかさねたが、ついに失脚した。

(82) この上呈文は魯迅の起草に係るもので、いま『魯迅生平事跡』(北京魯迅博物館編)にその全文が収録されている。

(83) 一九一九年日本が対支二十一箇条を中国側につきつけた日を記念している。大總統袁世凱は五月九日これを承諾した。

(84) この六名は蒲振声、張平江、鄭德音、劉和珍、許広平、姜伯誦である。

(85) この署名者は馬裕藻、沈尹默、周樹人(魯迅)、李泰森、錢玄同、沈兼士、周作人の七名であり、その全文はいま『文芸月報』(一九五六年・十月号)に再録されている。この七名の署名者中、李泰森(史学系主任教員)以外はすべて浙江人で、北京大学国文系教員であつた。現代評論派の陳源はこれを利用して女師大の風潮は某籍某系人の暗躍によると喧伝した。

(86) この維持会のメンバーは公選による教員九名(魯迅を含む)、学生十二名である。なお、この会は事件解決後一九二六年一月十三日解散した。

(87) 許寿裳はこの免職を『倒填日子』或いは『違法』と述べているが(『女師大風潮』)「亡友魯迅印象記」、魯迅自身の記述によれば、章士釗は八月

十二日に上申、十三日に批准をえたが、魯迅が委員に推挙されたのは八月十三日であり(『從胡適說到牙齒』「墳」参照)、また、許広平によれば、これは明らかに章士釗の越権、つまり、旧制度では僉事職は總統の任命によるもので教育総長にはこれを更迭する権限はない(『女師大風潮』三二八、慘案)『魯迅回憶錄』参照)という。

(88) この八月十九日は王士著『魯迅』には八月十七日となつてゐるが、いましばらく『魯迅全集』3(人民文学社版)の注釈による。

(89) その全文は許寿裳『女師大風潮』(『亡友魯迅印象記』)に収録されている。

(90) これを『魯迅日記』に参照すれば、『三十日……下午季市来、同至女師大教育維持会送学生復校。』とみえる。

(91) この女子大学は、章士釗が八月十九日教育部會議において女師大を改組した北京女子大学であるが、なお、女師大生の比率は、陳源によれば四十名対三百五十名であるという(『阿地書』「華蓋集」『魯迅全集』3・人民文学社版・注釈9参照)。

(92) 後註(96)参照。

(93) この三月は、『魯迅日記』を参照すれば三月十一日の条に『得許広平信』とみえる。因みに、この日記に許広平の名がみえるのはこれが最初である。

(94) これは『魯迅日記』を参照すれば四月十二日であり、『許広平林卓鳳来』とみえる。

(95) 平政院は行政訴訟及び官吏の糾弾等を司どる官署で、民国初年に設けられた。提訴の日は、『魯迅日記』八月三十一日の条に『上午赴平政院納訴訟費三十元、控章士釗。』とみえる。

(96) 魯迅の雜感文については、郁達夫の『魯迅の文体簡煉得像一把匕首、能以寸鉄殺人、一刀見血。重要之点、抓住了之後、只消三言兩語就可以主題道破——這是魯迅作文的秘訣。』(『中国新文学大系散文二集導言』)という評が最もよくその特質をつらぬいてゐるといえる。

(97) 魯迅自身の言葉に『有一分熱、發一分光、就令螢火一般、也可以在黑暗裏發一點光、不必等候炬火。』(『阿地書』四十一「熱風」)とある。

(98) この『文学者と政治家』一章だけを除いた理由は、おそらく、この両者

魯迅伝覚書 猪俣

の接近と相互理解を述べる主旨が、中国の現実にとつて余りに懸絶している  
とみただからであらう。

(99) なお、十二月三日の条に『夜作』『象牙之塔』『跋記』（『魯迅日記』）  
とみえるが、『年譜』はこれによつて『十二月訳成……』としたものと思わ  
れる。

(100) 「魯迅日記」を参照すれば、黎明中学は九月十日（十二月十三日辞任）、  
大中公学は九月十八日、中国大学は九月二十三日が最初であり、それぞれ週  
一回の講義である。

(101) 「魯迅伝覚書」（『北大文学部紀要』6）参照。

(102) 「魯迅伝覚書」（『北大文学部紀要』9）参照。

附 録 : 魯 迅 年 譜 補 遺 (一九一八—一九二五)

| 西暦(中国日本)            | [年令] | 魯迅事蹟                                                                                                                        | 中国 文化 界 の 動 向                                                                                                                                                                                                                                                                                          | 外 国 文 学                                                                                                                              | 歴 史 的 背 景                                                  |                                                                                                                                           |
|---------------------|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1918 (民国7)<br>(大正7) | [38] | 5月<br>△狂人日記Vを発表（「新青年」<br>第四卷第五号）。<br>始めて魯迅という筆名を用いる。<br>9月<br>この月から「新青年」の「随感録」<br>欄に短評を陸続と発表。<br><br>この年も拓本の搜集、研究をつづ<br>ける。 | ②李大釗ら、北京でマルクス主義研<br>究会を組織。<br>③「晨报副刊」創刊。「新青年」、全<br>面的に白話採用。「随感録」の欄<br>を設ける(4)「易ト生専号」(6)「戯<br>劇改良専号」(7)<br>⑤△建設的文学革命論V(胡適・「新<br>青年」第4巻第4号)(4)<br>△Bolshevismの勝利V△庶民的<br>勝利V(李大釗・「新青年」第5<br>巻第5号)(11)<br>△人的文学V(周作人・「新青年」<br>第5巻第6号)(12)<br>⑥教育部、注音字母表を公布。<br>⑦劉復ら各校教授欧米に留学。<br>郭沫若、九州大学医学部に入学。<br>蘇曼殊死。 | ①△小さき者へV(有島武郎・<br>「新潮」)(1)<br>△生れ出づる悩みV(有島武<br>郎・「東京日日」)(4)<br>△地獄変V(芥川竜之介・「東<br>日」大毎)(5)<br>「赤い鳥」△「新しき村」創刊(7)<br>島村抱月死。<br>②ブレハーフ死。 | ①△恩讐の彼方にV(菊地寛・<br>「中央公論」)(1)<br>「改造」創刊(4)<br>△文芸の社会的意義V(片上 | ①広東軍政府改組、孫文日本亡<br>命(5)<br>日華共同防衛軍事協定(5)<br>日本軍のシベリヤ出兵に反対<br>し留日学生一斉帰国(7)<br>徐世昌、大總統当選(10)<br>②米騒動(8)新人会生る(12)<br>③ドイツ革命。<br>第一次世界大戦終る(11) |
| 4月                  | 1月   | △随感録四十V(愛情についての<br>意見)を発表。                                                                                                  | ①蔡元培と林紓の白話に関する論争<br>(3)<br>胡適と李大釗「問題と主義」論争<br>(7)                                                                                                                                                                                                                                                      | ①△恩讐の彼方にV(菊地寛・<br>「中央公論」)(1)<br>「改造」創刊(4)<br>△文芸の社会的意義V(片上                                                                           | ①上海で南北和平会議(2)<br>五四運動(5)<br>全国学生連合会成立、各地で<br>排日運動おこり上海労働者ゼ |                                                                                                                                           |

| 1919 (民国8)<br>大正8<br>[39]                                                                                                                                                                                                                              | 1920 (民国9)<br>大正9<br>[40]                                                                                                                                                                 |                                                                                                           |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>5月<br/>△孔乙己Vを発表。</p> <p>5月<br/>△葉Vを発表。</p> <p>8月<br/>公用庫八道灣の家屋を買い、弟作人の家族と共に移る(11月)。</p> <p>11月<br/>△我們現在怎樣做父親V(家庭改革と子女解放についての意見)を発表。</p> <p>12月<br/>休暇をとり、津浦線經由帰省、家を整理し、母及び末弟建人らを北京に迎える。</p> <p>この年も拓本の搜集・研究をつづける。</p>                              | <p>1月<br/>『一個青年的夢』(武者小路実篤著)を訳了。</p> <p>6月<br/>△明天Vを発表。</p> <p>7月<br/>△一件小事Vを発表。</p> <p>10月<br/>『工人綏惠略夫』(アルツイバーシエフ著)を訳了。</p> <p>△頭髮的故事Vを発表。</p> <p>この年の秋(實際の出講は冬)から北京大学、北京高等師範学校講師を兼任。</p> | <p>2・3月<br/>再び『嵇康集』を校合。</p> <p>5月<br/>△故郷Vを発表。</p> <p>10月<br/>△近代捷克文学概観V △小俄羅斯</p>                        |
| <p>② 北京大学に歌謡研究会がなる。</p> <p>③ 「新潮」(傅斯年、羅家倫・英文名 The Renaissance) 創刊(1)</p> <p>「少年中国」(李大釗、田漢ら・少年中国社) 創刊(7)</p> <p>「新青年」馬克思主義專号(5)</p> <p>⑤ △日本的新村V(周作人・「新青年」第6巻第3号)(3)</p> <p>△実験主義V(胡適・「新青年」第6巻第4号)(4)</p> <p>『中国哲学史大綱』(胡適)</p> <p>⑦ デューイ来朝、各地で講演(4)</p> | <p>② 北京大学、女子の入学を許可(2)</p> <p>周作人、鄭振鐸、沈雁冰(茅盾)ら文学研究会を結成(1)</p> <p>胡愈之、上海世界語者協会を設立。</p> <p>⑤ 「嘗試集」(胡適・亜東圖書館)</p> <p>⑥ 国音字典を公布。</p> <p>⑦ 瞿秋白、モスクワ留学。</p>                                      | <p>② 郭沫若、郁達夫、成仿吾ら、東京で創造社結成(7)</p> <p>茅盾、歐陽予倩ら民衆戲劇社結成</p> <p>(5) 北京大学に世界語科創設。</p> <p>③ 「小説月報」改組して文学研究会</p> |
| <p>伸・「大観」(9)</p> <p>② 「一五〇、〇〇〇、〇〇〇」(マヤコフスキー、詩)</p> <p>アンドレーエフ死。</p>                                                                                                                                                                                    | <p>① 「象牙の塔を出て」(厨川白村・改造社)(6)</p> <p>△エロシエンコ・ワシリを憶ふV(江口煥「読売新聞」)</p> <p>(6) 「世界文化史大系」(ウエルズ、史)</p>                                                                                            | <p>① △暗夜行路V(志賀直哉・「改造」)(1)</p> <p>「種蒔く人」創刊(2)</p> <p>『愛と認識との出発』(倉田百三・岩波書店)(3)</p> <p>『最後の溜息』(エロシエン</p>     |
| <p>ネスト(6)</p> <p>中華革命党、中国国民党と改称(10)</p> <p>② この年もシベリア出兵。</p> <p>③ コミンテルン成立(3)</p> <p>朝鮮三・一万才事件(3)</p> <p>ヴェルサイユ条約(6)</p>                                                                                                                               | <p>① 中国最初のメーデー(5)</p> <p>中国社会主義青年団成立(8)</p> <p>中国共産党創立準備会(9)</p> <p>孫文ら広東に入る(1)</p> <p>② 日本最初のメーデー(5)</p> <p>③ 国際連盟成立(1)</p> <p>カラハン宣言(9)</p> <p>フランス共産党結成。</p>                           | <p>① 広東政府成立、孫文總統に就任(4)</p> <p>中国共産党成立、上海で第一回代表大会(7)</p> <p>アンダーソン、周口店で北京原人を発見。</p>                        |

| 1921 (民国10年)<br>[41]                                                                                                                                           | 1922 (民国11年)<br>[42]                                                                                                                                                                                                                                                   |                                                                                                          |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>文学略説Vを訳載(小説月報) 12巻10号・被損害民族的文学号)。<br/>△阿Q正伝Vを連載(晨报副刊)。<br/>この年も北京大学、北京高等師範学校講師を兼任。</p>                                                                      | <p>1月<br/>『愛羅先珂童話集』序を書く。<br/>2月<br/>エロシエンコを上海より招き同居。<br/>2・8月<br/>再び『嵇康集』を校合。<br/>5月<br/>『桃色的雲』(エロシエンコ著・童話劇)を訳了。<br/>7月<br/>この月から12月にかけて△白光V△端午節V△免和猫V△不周山V(のちに△補天Vと改題)△鴨的喜劇Vを発表。<br/>12月<br/>『呐喊』序を書く。<br/>この年も北京大学、北京高等師範学校講師を兼任。</p>                                | <p>6月<br/>『現代日本小説集』を翻訳出版(周作人と共訳)。<br/>8月<br/>甄塔胡同六十一号に転居(周作人と不和のため)。<br/>『呐喊』を出版。</p>                    |
| <p>の機関誌となる(1)<br/>「文学週報」(文学研究会)創刊(5)<br/>④「沈淪」(郁達夫・泰東書局)△超人V(謝冰心・小説月報)第12巻第4期(4)<br/>⑤「女神」(郭沫若・泰東書局)<br/>『紅樓夢考証』(胡適)<br/>⑦エロシエンコ上海世界語学校講師となる。<br/>敵復、芳乃宣死。</p> | <p>③「創造季刊」(郭沫若・郁達夫・成仿吾・泰東書局)創刊(5)<br/>「努力週刊」(胡適、錢玄同、顧頡剛)創刊(5)<br/>「嚮導」(陳独秀・中国共産党機関誌・週刊)創刊(9)<br/>④△綴網勞蛛V(落華生・小説月報)第13巻第2期(2)<br/>△咖啡店之一夜V(田漢・「創造季刊」第1巻第1期)<br/>⑤△自然主義与中国現代小説V(沈雁冰・小説月報)第13巻第7期(7)<br/>⑦「東西文化及其哲学」(梁漱溟、これより梁啓超らと東西文化論争おこる)<br/>⑦エロシエンコ北京大学世界語講師となる。</p> | <p>③「創造週報」(郭沫若・創造社)創刊(5)<br/>「申報」五十年紀念「最近之五十年」<br/>④△春風沈醉の晩上V(郁達夫・「創造季刊」第2巻第2期)<br/>『稻草人』(葉紹鈞・商務印書館)</p> |
| <p>コ・秋田雨雀編・叢文閣) ②「苦悩の中を行く」(アレクセイ・トルストイ、小説)コロレンコアレクサンドル・ブローク死。</p>                                                                                              | <p>①△宣言一つV(有島武郎・「改造」) ①<br/>△第四階級の文学V(平林初之輔・「解放」) ①<br/>有島武郎・農園を解放(8)森鷗外死。<br/>②「装甲列車14」69 (イヴァーノフ、小説)<br/>③「ユリシイズ」(ジョイス、小説)</p>                                                                                                                                       | <p>①「文芸春秋」創刊(1)△日輪V(横光利一・「新小説」) ⑤<br/>△十字街頭を行くV(厨川白村・改造) ②<br/>有島武郎情死。<br/>厨川白村死。</p>                    |
| <p>②原敬暗殺(1)<br/>③ソヴェエト、ネップ採用(7)ワシントン軍縮会議(1)蒙古人民革命政府成立。</p>                                                                                                     | <p>①国民党第一次北伐、失敗(2)ワシントンで九ヶ国条約締結(石井・ランシング協定を破棄) ②<br/>広東で第一回全国労働大会(5)教育部、学制會議を召集(9)壬戌学制公布(11)<br/>②水平社結成(3)<br/>③日本共産党結成(6)<br/>③ムツクリーニのクーデター(10)ソヴェト社会主義共和国連邦成立。<br/>アイルランド独立。</p>                                                                                     | <p>①孫文、ヨッフエと会見(1)大元帥に再任(2)<br/>京漢鉄道ゼネスト(2)<br/>旅順大連回収交渉を日本に提案して拒否され、各地で排日運動起る(3)<br/>共産党、国共合作を決議(6)</p>  |

| 1924 (民国13)<br>大正13<br>[44]                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         | 1923 (民国12)<br>大正12<br>[43]                                                                                                                                                                 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>12月 阜成門内西三条胡同二十一号の家屋を賣う。<br/>『中国小説史略』(上巻)を出版。<br/>北京女子高等師範学校に於て(娜拉走后怎樣)と題して講演。<br/>この年も北京大学、北京高等師範学校講師を兼任、秋から新らしく北京女子高等師範学校、世界語専門学校講師も兼任。</p> <p>1月 北京師範大学附属中学校に於て「未有天才之前」と題して講演。</p> <p>3月 この月から5月にかけて△祝福△幸福的家庭△肥田△在酒楼上△を發表。</p> <p>5月 西三条胡同の新居に移る。</p> <p>6月 周作人夫妻とついに決裂。<br/>『中国小説史略』(下巻)出版。<br/>『嵇康集』校合を完成、その序を書く。</p> <p>7月 西北大学の夏期学校に招かれ「中国小説の歴史の変遷」を講述。</p> <p>9月 この月から12月にかけて散文詩△秋夜△影的告别△求乞者△△我的失恋△△復仇△を書く。</p> <p>10月 『苦悶的象徴』(厨川白村著)を訳了。</p> <p>11月</p> | <p>⑤△説呐喊▽(沈雁冰「文学週報」第91期)⑩<br/>『自己的園地』(周作人・晨報社)<br/>『科学与人生観』(垂東編輯部編・これより梁啓超・張君勱と丁文江・唐鉞との間に科学と人生観論争起る)①<br/>『繁星』(謝冰心・商務印書館文学研究会叢書本)<br/>『星空』(郭沫若・泰東書局・詩歌、戯曲、散文を含む)<br/>⑥ 国語辞典編纂所創設。</p>       |
| <p>③「語絲」(魯迅、孫伏園、周作人林語堂ら・北新書局)創刊①<br/>語絲派に対抗して「現代評論」(胡適、徐志摩、陳源ら・現代評論社)創刊②<br/>「浅草季刊」(馮至、陳翔鶴ら)創刊。<br/>⑤『五十年來中国文学』(胡適・申報社)<br/>『俄国文学史略』(鄭振鐸・商務印書館)<br/>⑦ 老舍、ロンドン留学。<br/>林紓死。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                       | <p>②『私の大学』(ゴリキー、小説)<br/>レフ(芸術左翼戦線)結成。</p>                                                                                                                                                   |
| <p>①「文芸戦線」創刊⑥<br/>築地小劇場創立⑥<br/>△伸子▽(中条百合子・「改造」)⑨<br/>新感覺派の抬頭。<br/>②『ヴラジミール・イリイチ・レーニン』(マヤコフスキー、詩)<br/>『鉄の流れ』(セラフィモヴィチ、小説)<br/>③『魔の山』(トーマス・マン、小説)<br/>カフカ、アナートル・フランス死。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                            | <p>① 国民党、一全会で容共を決議①<br/>タゴール來華④<br/>黃埔軍官学校設立⑤<br/>孫文、同軍官学校で「三民主義」を講演⑥<br/>孫文、北伐を宣し⑨北京に入る①<br/>曹錕退位①<br/>② 不逞鮮人事件①<br/>日本フエビアン協会成立⑥<br/>タゴール來日⑥<br/>③ レーニン死、スターリン書記長就任①<br/>イギリス労働党内閣成立①</p> |
| <p>① 国民党、一全会で容共を決議①<br/>タゴール來華④<br/>黃埔軍官学校設立⑤<br/>孫文、同軍官学校で「三民主義」を講演⑥<br/>孫文、北伐を宣し⑨北京に入る①<br/>曹錕退位①<br/>② 不逞鮮人事件①<br/>日本フエビアン協会成立⑥<br/>タゴール來日⑥<br/>③ レーニン死、スターリン書記長就任①<br/>イギリス労働党内閣成立①</p>                                                                                                                                                                                                                                                                         | <p>コミンテルン代表ボロジン來華し国民党顧問となる⑩<br/>北京で曹錕大總統就任⑩<br/>国民党改組⑩<br/>② 関東大震災⑨<br/>大杉栄虐殺。<br/>③ トルコ共和国成立⑩</p>                                                                                          |

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |                                                                                                                                                                                                                            |  |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| 1925 (民国14)<br>(大正14)<br>[45]                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                                                                                            |  |
| 2月<br>『出了象牙之塔』(厨川白村著)を訳了。<br>『京報副刊』の求めに応じ、△青年必読書△を発表。<br>3月<br>この月から11月にかけて△長明燈△示衆△高老夫子△孤独者△傷逝△弟兄△離婚△を書く。<br>4月<br>青年文学者を援助して莽原社を設立「莽原」週刊を創刊。<br>8月<br>教育総長章士釗による北京女子師範大学非法解散に抗議し、多数の教職員と校務維持会を組織、そのため章士釗に違法免職さる(所謂「女師大事件」)。<br>11月<br>雑感第一集『熱風』出版。<br>この年も「語絲」に寄稿、また「国民新報」「莽原」の編集の外、未名社を組織し、外国文学の翻訳育成につとめる。<br>また、北京大学、北京女子師範大学講師を兼任、その他九月以降中国大学、黎明中学、大中公学の講師を兼任。 | 「語絲」の創刊を支持し、その熱心な寄稿者となる。<br>この年も北京大学、北京師範大学、北京女子高等師範学校、世界語専門学校講師を兼任。                                                                                                                                                       |  |
| ③「甲寅週刊」(章士釗、一九一四年東京で月刊として創刊せるもの改組)創刊(7)<br>「洪水」(創造社旧同人および蔣光慈ら・光華書局)(9)<br>「莽原」(魯迅、高长虹、韋素園ら)(10)<br>④「少年飄泊者」(蔣光慈・亞東圖書館)<br>『綴網勞蛛』(落華生・商務印書館・命命鳥、商人婦などを含む)<br>『三個叛逆的女性』(郭沫若・光華書局)<br>『一隻馬蜂』(丁西林・現代評論社)<br>⑤『志摩的詩』(徐志摩・北新書局)<br>『童心』(王統照・商務印書館)<br>△中国神話的研究△(沈雁冰・「小説月報」第16卷第1期)<br>⑥「國語週刊」(錢玄同、黎錦熙ら甲寅派に反対の論陣。俗称「宇宙」)創刊(6)                                             | ①△新感覺派論△(千葉龜雄・「文芸時代」)(4)<br>『女工哀史』(細井和喜蔵・改造社)(7)<br>『支那遊記』(芥川竜之助・改造社)(11)<br>日本プロレタリア文芸聯盟創立(12)<br>蔵原惟人、ソ連遊学。<br>②『アルタモーフ家の事業』(ゴリッキ、小説)<br>『芸術文学の領域における党の政策について』(党中央委員会決議)<br>③『愛と死の戯れ』(ロマン・ロラン、戯曲)<br>『アメリカの悲劇』(ドライサー、小説) |  |
| ③孫文、北京で死去(3)<br>第二回全国労働大会(5)中華全国総工会成立。<br>上海全市ゼネスト(五・三〇惨案)(5)<br>広東に国民政府成立(7)<br>蔣介石、右派を弾圧したため、右派分離して西山會議(11)<br>治安維持法案、衆院通過(3)<br>普通選挙法公布(5)<br>日本労働組合評議会发生(5)<br>「無産者新聞」創刊(9)<br>福本イヅム流行(10)<br>③ソ連、トロツキー失脚、亡命。                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                                                                            |  |

「この附録の△但書△はすべて「魯迅伝覚書」(「北大文学部紀要」9)のそれと同じである。」